

---

# ウルティメイトフォースゼロ～THE MATERIAL OF SAGA～

A G I T

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ウルティメイトフォースゼロ～THE MATERIAL OF  
SAGA～

### 【Zコード】

N1303N

### 【作者名】

AGIT

### 【あらすじ】

ベリアル銀河帝国との戦いから一ヶ月、ウルティメイトフォースゼロはアナザースペースの各惑星に散らばり活動を続けていた。ウルティメイトフォースゼロのリーダーであるウルトラマンゼロはレギオノイドとダークロープスの目撃報告があつた水の惑星アクアスに訪れそこで見たものは……？

## Episode · 01 惑星アクアス（前書き）

今回はウルティメイトフォースゼロを書く初めての小説です、ベリアル銀河帝国の後という形で。

そこに大人化したマテリアルズと出会う的な、それぞれの出会いに結構時間を使つようになります。

OP『キラメク未来』

ED 揿入歌『すすめ！ウルトラマンゼロ』

登場怪獣

双子怪獣ブラックギラス  
双子怪獣レッドギラス  
帝国機兵レギオノイド  
帝国獵兵ダークロープス

登場

「これはアナザースペースと呼ばれる我々が住む宇宙とは別の世界の宇宙。

この宇宙は、我々の宇宙でかつてM78星雲、光の国を壊滅させようとした邪悪なウルトラマン、ウルトラマンベリアルが自分の宇宙である正義に目覚めた若きウルトラマンと歴代のウルトラマン達に倒されこのアナザースペースに何らかの拍子に飛ばされてしまいガイザー・ベリアルとして悪業を働いていた。

アナザースペースでの悪業は元の世界の宇宙にある光の国にまで魔の手が伸びていた、

その尖兵としてダークロップスと呼ばれるベリアルを倒したウルトラマンに似た赤い一つ眼の黒いロボットを送り込み光の国の都市を破壊を開始、

宇宙警備隊の戦士達が交戦を始めた。

乱戦の中、現れたのはベリアルを倒し光の国を救った赤と青、銀に胸に青く輝くクリスタル、カラータイマーが付き肩からプロテクターが掛けられ頭に二つのブーメラン、縁に輝くランプに二つの眼、ダークロップスのモデルとなつた若きウルトラマン、ウルトラマンゼロがダークロップスを自分の父、赤い巨人ウルトラセブンと共に撃退

した。

そしてダークロップスが別の宇宙からやってきたと判明しその宇宙に送り込む事になったのがウルトラマンゼロだった。  
光の国のすべてのウルトラマンのエネルギーを集中させゼロをアナザースペースに送り込み惑星アヌーという星で助けた青年ランの体を借り、そしてランの弟ナオと共に宇宙を護るという『バラージの盾』を求め旅することに。

その旅で惑星エスマーラルダの王女エメラナ、エスマーラルダ王家に仕える鋼鉄の武人ジャンボット、炎の海賊の戦士グレンファイヤー、鏡の星の勇者ミラーナイトを仲間にしカイザーベリアル率いる銀河帝国に戦いを挑みアナザースペースで仲間とした者達の各惑星の人達と共にベリアル共々銀河帝国を倒したのだった。

戦いが終わり、ゼロとランは分離、だがベリアルが倒されたからと言つてアナザースペースの悪は滅んでいない、銀河帝国の生き残りもいる。

ゼロはジャンボット、グレンファイヤー、ミラーナイトと共にアナザースペースでの宇宙警備隊、ウルティメイトフォースゼロを結成しこの宇宙の平和を守るために再び戦い始めるのだった。

カイザーベリアルとの戦いから一ヶ月は経過しようとしていた。ゼロは左腕に青いクリスタルが付いた銀色のブレスレット、ウルティメイトブレスレットを嵌めてアナザースペースの惑星を飛び回る毎日を送っていた。

「確かにこの惑星だよな……レギオノイドやダークロップスを見掛けられたのは」

ゼロは銀河帝国の残党である帝国機兵レギオノイドと帝国獵兵、ダークロップスがこの惑星の近くを航行していた宇宙船の乗組員が見掛けられたと報告があった、

今、彼の目のために見える青い惑星を訪れていた。

「後、未知のエネルギー反応が捉えられたのもこじだ」

他にウルトラマンの力の源、光エネルギーでもないエネルギーの反応を掴みその調査も兼ねてやってきたのだ。

「まずは入らねーと分からねーか……デュアツ！」

両手を大きく広げゼロはその惑星の大気圏に突入した。

そして大気圏内に入るとそこには広がるのは青い水平線とその中に浮かぶ小さな島々だ、この惑星は陸地は少ない代わりに水が多い惑星のようだった、

名前を付けるとしたらアクアスであろう、アナザースペースでもこの惑星はアクアスと呼ばれておりゼロも名前と情報は知っていた。

「なかなかいい景色じゃねーか」

感想を述べながら飛行を続けレギオノイドとダークロープスが潜伏していないか空の上から覗くように調査する。

「見たところ特に何もねーけど…………見間違えかあ？」

愚痴を溢しながら高度を落とし正面が水面に近付いていく、飛行して発生する風で水が弾けていく。

「結構冷てーな」

体を左に傾け飛ぶ方向を変える。

その瞬間に突如爆発音が鳴り響く。

「ゼロからだー!？」

ゼロは一旦その場で立つように静止し辺りを見渡すと右方向を向くと遠くで黒煙が空へ向かって舞っているのが見えた。

「あそこか！ ジュアッ！」

ゼロは正面を下に向け両手を前に向け広げて飛行し黒煙が舞う方向へ急いで向かつた、この惑星の住人にもしもの事があつたらと最悪な事態を考えつつ。

私は消えるはずだつた、彼女に負けて。

私と同じ生まれをした他の二人はその元となつたオリジナルの魔導師達に敗北し消滅してしまつた、私も同じように…………それなのに…………私に勝つたあなたはなんで泣いているのですか？ 私に勝つたのに…………

私は消えますが……………これからあなたの道が勝利で飾られますよ!!。

\*

ゼロが調査に訪れる前の水の惑星アクアス、陸地が少ないこの惑星の孤島に一人の、赤紫を基準にし学生のような服に赤いラインがあり胸に紫のリボンを付け同じ色合いの長いスカートで赤紫の三日月の中に水色の宝石が入った飾りを付けた杖ルシフェリオンを握つた茶髪の長い髪の女性が横たわっていた。

彼女の名は星光の殲滅者、又の名をシュテル・ザ・デストラクター、元々は10歳ぐらいの少女の姿だったはずの彼女だが何かの拍子に20代ぐらいの女性の姿となりこの惑星に倒れていた、彼女もまた別の宇宙、ゼロやこのアナザースペースとは違う宇宙から来たのだ。

すると彼女は気が付き目を覚ますと起き上がり辺りと自分の姿を見て驚きを隠せなかった。

「なぜ私は存在を……そしてここの姿は……」

自分の姿が大人となっていたのはもちろん、後は消滅したはず、そう思っていた、感じていたのに肉体は成長し未だ存在していると、いつ事実に戸惑いを隠せなかつた。

「ここは一体……」

辺りを見渡しても水平線と小さな孤島しか見えずここは自分がいた宇宙にある水と緑の惑星地球ではないことがわかつた。

「どうやら別の次元世界に飛ばされてしまったようですね」

彼女の世界では別宇宙ではなく次元世界と呼んでいた、シユテルはただの人間ではない、魔導師と呼ばれる魔法使いで闇の書という魔導師の力の源、魔力を蒐集するシステムの破片からその闇の書を破壊した魔導師の少女をモデルにし生み出されたのだ、だが今の姿はその少女とは違つた、まるで十年後の姿を「写したような体に、短かつた茶髪もロングヘアーとなつていた。

そこに突然水没きが上がり水中からダークロップスと両手がドリルの帝国機兵レギオノイドが浮上し姿を現した。

「質量兵器……」

シユテルが知るとある世界の組織では機械等の兵器を全て質量兵器と呼ばれレギオノイドやダークロップスもそれに当て嵌まる。

「やらないといけないみたいですね」

ルシフェリオンを持ち構えるとその杖先に魔力が集結していき桃色の魔力でできた光球、魔力スフィアが生まれ。

「ブلاست……ファイヤアアアアアアアアーツ！――――――！」

「！」

\*

そして現在、シユテルはこれからどうしたものかとアクアス中を飛び回っていた、今の自分にはかつてあつた闇の書を復活させるという使命はもうない、それなのにまだ存在しているのは何か理由があるはず、そう考えていた。

「どこを飛んでも水ばっかですね…………人の気配すら感じない」

だが魚類とかは豊富に生息しており食料には困らなかつた。

次にまたレギオノイド達が現れないか警戒しつつ飛行を続けていると。

「つー」

何かの気配を感じたのだ、人の気配がなかつたこの惑星でそれと同じような、だがその気配と同時に別のエネルギーも感じていた、魔力とは違うエネルギーを。

「接触してみますか……」

何か情報が得られるかもしれない、そう考えこの惑星に訪れた者に接触を測ることにしその方向へ向かおうとしたら。

「また……！」

海中からレギオノイドとダークロップスが浮上するが何かおかしかつた、溺れているようにも見えたからだ。

「海中に何かいる」

そう、この海域には何かいる、次第に一機は海中に引きずり込まれ爆発を起こし、その二機を破壊した巨大な影がシユテルの前に姿を現した。

そのレギオノイド達の爆発とは知らずにゼロは飛行を続けていた。

「！」の先だな！」

飛行速度を上げ、どんどん黒煙が昇る地点に接近していく。  
ゼロがその先で見たものとは、それは一体の赤と黒の巨大生物と対峙する一人の女性、シユテル・ザ・デストラクターだった。

「女！？ それに……！」

ゼロは赤と黒の一體の巨大生物に見覚えがあつた。

「ブラックギラスにレッドギラス！」

背中に大きな角が生え頭部にも長く鋭い角が生えたそれぞれの体色をした双子怪獣ブラックギラスとレッドギラスだ、一體は別名通り双子の怪獣である。

「なぜこの宇宙に俺の宇宙の怪獣が……」

だが今はこの怪獣からシユテルを守るのが先決、後で彼女から話を聞こうと考え頭の角から放つ赤い光線を放ちながら暴れ狂う双子怪獣達に立ち向かった。

「アレは……巨人？」

シユテルの皿にゼロが写ると双子怪獣達も気付き皿標をシユテルからゼロに変えた。

「ギシャアアアアーッ！――！」

「ゼアツー！」

ゼロは足を海中に入れまるで立っているかのように浮いてみせる  
と走りだしブラックギラスに強力なパンチを繰り出す。

「グエニニニニニニニニーツ！……！？」

ゼロのパンチはブラックギラスの鳩尾にヒットし苦痛の鳴き声を  
上げながら後退り海中に突き出てていた間に足を引っ掛け転倒、レ  
ッドギラスは次は俺の番だ！ と言つよつビーラミングをするとず  
かずかと走りだしゼロに襲い掛かる。

「デエヤアアアツー！」

突進していくレッドギラスの勢いを利用してそのまま投げ飛ばす。

「すーじ……」

シユテルはその戦いをただじつと見ていたがブラックギラスが海  
中から上がつてこないのに気付いた。

「まさか！」

「気付いた時には遅かった。

「ジエアアアーツー！？」

ゼロは海中に引きずり込まれてしまった、この透き通るような綺  
麗な海でも海底は暗く、気付かれにくい、その地形を利用したブラ  
ックギラスに足を掴まれてしまつたのだ。

「 」

ゼロはそのまま海底に引きずり込まれた、レッドギラスもまた海底に潜りゼロの足を掴んで沈む速度を早めていた。

「離せえええええーつ……………。」

足を動かそうと力を入れるが一大怪獣の前ではまったく動かず海底奥深くに引きずり込まれてしまった。

双子性齧は足を放す。七口は海底の底の地に足を付く。そこは光が射し込まないため暗く視界が悪かつた。

(綺麗な惑星なのに底は結構暗いんだな)

黄色く輝く眼が暗闇を照らすが全体は見渡せず視界が悪いのは変わりなかつた。

（ハーナイトがいればな……）

ミラーナイトが外から鏡を作り海底まで光を反射させ射してくれ  
るだらうと思うが今いない者の事を考えても仕方ない、神経を研ぎ  
澄ましブラックガラスとレッドガラスがどこから仕掛けるか注意を  
するのだが。

「グワアッ！？」

背後からブランクギラスの背中の角による攻撃を食らい前のめりに躓く。

双子怪獣は回りを泳いでいるようで頭の角はレーダーとなつてい

るためそれを頼りに泳いでいた、

次はレッドギラスの攻撃を腹部に食らい後退りまたブラックギラスの攻撃を背中に食らい前へ倒れた。

(くそお……)

悔しそうに拳を地表に叩き付け起き上がるが立たない、考え事をしていた、この状況をどう打開するか、このままでは双子怪獣の必殺技、攻守優れた回転攻撃、ギラススピンドームを刺される可能性があるからだ。

(……………そつか、田で見なければいいんだ)

考える末ゼロは気付いた、田で見ているから田の前の事しか見えない、ならば感じ取ればいい、ゼロの光り輝く眼は消え完全に辺りは暗くなつた。

「…………」

ゼロは集中していた、師匠であるウルトラマンレオから習つた心眼、心の田で双子怪獣を見付けようとしていた。

外ではシユテルが空を飛び海面を見ていた。

「あの巨人は一体……」

ゼロの事が気になつていたようだ、今自分が曝されている状況を開けるためよ最大の手掛かりでもあるからだ、もし上がつて来なかつたら住人がないこの惑星で一人きりになつてしまふ、なぜか一人きりになるのが恐ろしいと感じていたため緊張から出た汗を流す。

「渦潮？」

その刹那、海面に渦潮ができていた。

(流れが変わった)

ブラックギラスとレッドギラスが両手を組み合って高速回転する  
ギラススピ n を炸裂して海流が変わったのだ。

(見えたぜ！)

ゼロの眼に再び光が戻り左足を上げ前に伸ばし右足を軸にし自分も高速回転を始めた。

ギラススピニにより強力な渦が発生したがゼロもそれに負けない渦が発生させる。

渦と渦はぶつかり合い激突する。

『グエニニニニニニニーッ――――――』

双子怪獣は大きな声を上げて回転速度を速めるがゼロも同じだつた。

するとゼロは飛び上がり左足を下げギラススピンの中に入り込み浮上始めた。

「海底で一体何が……」

渦潮が大きくなるのを見つめているとそこからブラックギラスとレッドギラスが水没きを上げて飛び出し落下して海面に叩きつけられた。

「ジニアツ！」

勢い良くゼロは海中から飛び出してきて空を舞う。

「ウルトラマン……」

シユテルは名前も知らないのになぜかその名を自分より高く空を舞うゼロを見て呴いているとブラックギラスは頭の角から赤い光線を放ち攻撃をする。

「…………」

シユテルはルシフュリオンをブラックギラスの角に向け魔力スフ

イアを杖先に集結させていく。

「ブلاストオオオ…………ファイヤアアアアアーツ…………！」

その魔力スフィアから桃色に輝く砲撃が放たれブラックギラスの角に直撃し圧し折る。

「もう一発！」

もう一発放ち今度はレッドギラスの角を破壊した。

双子怪獣は角を破壊された痛みに悶え苦しんでいるとゼロは頭の一いつのブーメラン、ゼロスラッガーを持ち急降下する。

「ゼロイヤアアアアアアアアアアアアアアーツ…………！」

海面に足を付き水没きを上げながら滑るように走り右手を真っ直ぐ伸ばしその手に握られたゼロスラッガーでレッドギラスの首を一閃、

次に回転して左手のゼロスラッガーでブラックギラスの首を一閃し双子怪獣の背後で右腕を曲げ左腕を伸ばした状態で静止する、その間、先にレッドギラスの首が崩れ落ち次にブラックギラスの首が崩れ落ち胴体が倒れると頭と共に海底深くに沈んでいった。

「呆気なかつたぜ」

ゼロスラッガーを頭に戻し空を浮遊するシユテルを見る。

「人間…………」

ショテルもゼロを見ていた、ゼロさまのままで話しづらいと考  
え金色の光となり近くの孤島の大地に付くとかつて一体化したラン  
の姿ではなく左腕にウルティメイトブレスレットが嵌められ白っぽ  
い少し汚れたような服を着た地球人の黒髪の青年の姿となる。  
ショテルもその孤島に足を付き向かい合い「あなたは?」と名前  
を尋ねる。

「俺の名前はウルトラマンゼロ、この姿の名前は…………モロボシ・  
シンだ」

To the Next Episode . . .

## Episode · 01 惑星アクアス（後書き）

マテリアルズが20代なのはリリマテで幼女なので、あつちは次第に成長していきますから、因みにStrikers編を考えていますし。

シンはフレニアステージの人間態を東京公演で演じたマモで、宮野さんです。

次回予告

シン

「闇の書？」

シユテル

「私はその本のバグみたいなものですよ」

シユテル

「あなたに何がわかるんですか？ 生きるための意味であった目標を失った私達の事を……」

シン

「分からぬーよー けどな、目標なんて気付けば次から次へと見つかっているんだ！」

ラゴラスエヴォ

「ガゴオオオオオオツ！－！－！－！」

ゼロ

「一緒にやるうぜ、シユテル！」

シユテル

「はい！」

次回『Episode・02 ゼロと星光』

お楽しみに

## Episode · 02 ゼロと星光（前書き）

少しエロネタに走りました、やりたかったんです！  
R - 15やつた方がいいかな？とか思っていたりしますがそれで読み始めた人が読めなくなつたらと思うと……

登場怪獣

進化怪獣ラゴラスエヴォ

登場

## Episode · 02 ゼロと星光

Episode · 02

ゼロと星光

「俺の名前はウルトラマンゼロ、この姿の名前は…………モロボシ・シンだ」

名前を紹介するウルトラマンゼロことモロボシ・シン。

「私は星光の殲滅者、又の名はシュテル・ザ・デストラクター、シユテルとも呼んでもください」

互いに自己紹介が終わると何者なのかを聞き始めた。

「俺はこの宇宙とは別の宇宙からやってきたウルトラマンだ」

だがシユテルにはウルトラマンという名に聞き覚えがなかつた、先ほどのは何となく呟いただけでどうこいつのなのはかは知らない、

そのためシンはウルトラマンについて話した。

「UJのアナザースペースつて宇宙とは別の宇宙にあるM78星雲、光の国を中心に設立された宇宙警備隊つて宇宙の平和を守る組織に所属している光の国の一族でその種類は様々、赤かつたり青かつたりってな」

ゼロは両方に当たる嵌まる体をしていたためそれを聞いてみたがシンも判らないようだ、なぜ自分は青と赤の体なのか。

「君は？」

「私は闇の書のプログラムの破片からできた魔導師です」

シンは「闇の書？ 魔導師？」と聞き覚えがない単語が出てきたため首を傾げる。

「魔導師とは魔法を使う者を一括りにした呼び方で先ほどのように砲撃魔法や様々な種類の魔法を使い戦います」

シンは腕を組んで近くの岩に座り話を聞く。

「闇の書とは魔導師の力の源、魔力を蒐集するための道具です、目的は研究のためなのですが……何者かがプログラムを変えてしまつたため滅びの道具となり各次元世界を漂っていたのですが」

今度は「次元世界」に疑問符を浮かべたため彼が言つ別の宇宙という意味と説明した、シユテルの方が頭が良いようだ。

「ある世界で闇の書は破壊されその破片から私や他に一人がその破壊した魔導師の少女達をモデルにし生まれ闇の書の復活させようと

したのですがやはり彼女達に阻止され、

他の一人と一緒に消滅したはずなのですがこうして成長した姿での世界に」

後の事は判らない、しかし互いの正体やどうこう身分なのかを教え合つた。

「簡単に言えば私はプログラムのバグみたいなものですよ」

その言葉にシンは引っ掛かりを感じたがあまり気にせずにいた。

「まだけど良かつたじゃねーか、消滅したと思つたらこうして存在して生きてるんだからさ」

その何気ない誰もがそう感じるだらうといつ言葉を掛けるのだが。

「良かつた？ 何が良かつたのですか？」

だが彼女の反応は違つていた、シンを見る目に怒りが露になつていた。

「あなたに何がわかるんですか？ 生きるための意味であつた目標を失つた私達の事を…………」

考えは人それぞれ、それを考えなかつたシンは彼女の心を知らないうちに傷付けていた。

「それは…………」

何も言い返せなかつた、もし自分も生きるための目標が無くなつ

たら彼女のように怒るだらうと。

「悪かったな……」

「別にいいです」

険悪な雰囲気になつてしまいシンは苦虫を噉んだような顔となり自分の何気ない発言に後悔していた。

するとシユテルは靴に桃色に光る羽根を展開させ浮遊する。

「どこに行くんだよ?」

「あなたには関係ありません、では」

冷たく言い捨てるヒューラはその場から飛んでいつてしまつた。

「待てよー。」

ウルティメイトブレスレットのクリスタルからメガネ型のレンズがオレンジのアイテム、ウルトラゼロアイを出しそれを持ち田に着眼した。

「デリカシーがない方でした」

ぶつぶつと言いながら飛行している後ろに気配が、振り向くとそこにはシンが変身もとい元の姿に戻った等身大のゼロが追い掛けてきた。

「どこの行くんだよ？」

「言つ必要ありません」

だがこの惑星は水と少しの陸地しかない、元の宇宙に帰れたり大気圏外を行くこともできないためただ闇雲に飛んでいるのだと氣付いていた。

ましてや怪獣が生息しているこの海で一人は危険、放つてはおけず追い掛けてきたのだ。

ゼロはシユテルの隣に並び飛行速度を合わせる。

「着いてこないでください」

「俺の行く方向もこっちなんだ、別に着いてきてる訳じゃねーよ

性格上素直じゃないゼロは遠回しにそう言いつつ飛行を続ける、シユテルが右に行けばゼロも右に、左に行けば左と後を追う、シユテルは「やっぱり着いてくる」と呟くがとにかく言ひ返すのはなれなかつた。

「…………」

二人は黙り込み黙々と飛行していたがその沈黙は一つの腹の虫により破られた。

「腹減ったな…………」

「はい」

「適当な島に降りて魚でも獲るか?」

「賛成です」

意見が一致して適当な小島に降りゼロはシンの姿に戻る。

「お前はどうやって魚を捕つてたんだ？」

「潜つて手掘みです」

外見に似合わぬワイルドな思いつつ流れ着いている適当な木の枝を拾う、まったく縁がないというわけでもないようだ。

「これを槍代わりにして俺が捕まえてくるから火を起こしてくれねーか？」

「かしこまりました」

ゼロの姿で潜ればと思ったがあの力はこんな事に使うべきではないと気付いていたため言わずこの島に元から落ちている木の枝や石を使つたりして火を起こすことに専念した。

「…………なあ」

火を見つめながらシンは話し掛けた。

「どうかなさいましたか？」

「数日間この惑星に一人でいたんだよな？　怖く…………なかつたか？」

その質問にどう答えればいいか分からぬシユテル、なぜ一人きりになるのを恐がっていたが未だに分からず困っていた。

「…………分かりません、ですが一人きりになるのを怖がっていたのは確かです、なぜなのかはわかりませんが」

「怖がっているじゃねーか」

その答えに揚げ足を取ると「別にいいじゃないでしか」と返ってきた。

「さつきは本当にごめんな、何も考えずに知ったような事言っちゃつて」

「謝るのは私もです、私も頭に血が昇つていました」

自分が悪いとは言わずちゃんと「も」を付ける辺りしつかりしている、魚がいい焼き加減となりその魚に噛り付き食す。

「こんな風に何か食べる前に消えたので少し感覚が新鮮です

「そうか？」

「はい」

一人は魚を食べていき食べれなかつたのは朝食にしようと考え

葉っぱに包んだ。

「これからどうするんだ?」

その問い掛けはもつともである、この惑星は住人がいない、開拓しようとも陸地はない、最低でも食料の魚類を捕獲するためにしか訪れる機会はない。

「そうですね……やはり目標がないですからね」

先ほどの事をまだ根に持っているのか、「目標」を強調して言つてくれる。

「分からぬよ、けどな、目標なんて気付けば次から次へと見つかつているんだよ」

「あなたも?」

頷いて返すと大きな欠伸をし日に涙を浮かべる。

「なんか眠くなつてきた…………」

「夜も遅いですから、寝ましょつか?」

「そうだな」

星空を眺めるよつに正面を上に向くよつに横になるが少し風は冷たく。

「使えよ」

シンは自分が羽織つていた服をシユテルに渡して横を向いた。

「…………ありがとうじゃこます」

少し微笑むとありがたくその服を掛け布団代わりに使い上に掛け  
臉を閉じた。

(寒いーー)

寒さには弱いシンだつたが強がりなためもう返して等は言えない  
と思こ無理せり寝に付くのだった。

そして朝日が昇ると同時に寝起きが悪かつたシンはすぐ起床し  
起き上がり眠い目を腕で擦る。

「そういやアイツは…………」

シユテルはまだ寝ているのか、隣を向き状況を確認すると。

「なつー!?」

驚愕した、自分が渡した服は確かに掛け布団として体に掛けてい

る、だが昨日着ていた紫の服を着ていない、綺麗な素肌が露になっていた。

魔導師の服バリアジャケットは攻撃からある程度は身を守るのだが服で被つていらない所も常に魔力の薄いバリアで被っている、従い寝る時もずっと着ていたら魔力を使い果たして戦えなくなる、そのためシユテルはバリアジャケットを解除したのだろうが私服とか着ていなままの状態、素肌でバリアジャケットを着ているのと同じようなものため今の状況に至っているのだろう。

「ん……あ、おはよう」やれこめや

そこで田覚めてしまいシンはすぐさま後ろを向き、「おはようー」と声が裏返りながら返す。

「どうかなさいましたか？」

気付いていないのかと思うが自分からバリアジャケットを解除したため気付いてはいるだろう。

「ふふふ、服！ 服！」

かなり動搖しながら服を指摘。

「あ、寒かったですか？」

起き上がる、起き上がるなよと思いつつ田をギュッと握る、文章で18禁に引っ掛けられないように丸く收めるとしたら子供が産まれた直後の姿としか表しようがない、それ以上は18禁送りになる。

「服ですか？ はいぢりぢわ」

天然なのかシユテルはシンに服を返した、なぜ慌てているのか田  
覚めた直後の脳では理解できません。

とりあえず後ろを向いたまま受け取りその服を羽織る、温もりを  
感じていた、先ほどまで素肌のまま着ていた服を着ていると実感し  
ながら。

(温けえー…………じゃねーーー)

なぜ温もりを香氣に感じているんだと心中で自分で自分を突っ込  
みつつ落ち着きを取り戻そうと深呼吸を一度する。

「なぜ後ろを向くのですか？」

やはり気付いていない、シンは自分の口からそれを指摘するのは  
何かを失つと思い言わなかつた。

「あ、いや、そのね…………」  
「ん？」

様子が変だなと思ったのかシユテルは近付いてきた、近付くな!  
嬉しいけど近付くな! と心中で叫ぶがその願いという名の叫  
びは届かず肩を手で叩かれ恐る恐るゆっくり頭だけ振り向くと。

「様子が変ですよ。昨日の魚に当たりましたか?」

後ろにはひやんとバリアジャケットに身を包んだシユテルがいた。

「あ、なんでもありません…………」

緊張の糸が解けたため力が抜け後ろへ倒れ正座しているシュテルを下から見上げる。

「顔色が悪いですよ?」

あなたの所為だと言つても分からぬだらうなと思い苦笑しつつ返す、当分この惑星にいる間は毎朝こんな事になるのかなと思いつつ溜め息を吐く。

やはり眠りから覚めた直後だからか大きな欠伸をし腕を伸はすと、

۲۰

同時に声を上げた、ショーテルはどこか触られている感覚がし下を向く、シンは何か触っている感覚がし手で触っているものを揉んでみる。

「あ……結構大きくて柔らかいですね」

もう笑うしかなかつた、上から見上げるシユテルの顔は無表情だった、無表情で立ち上がりルシフエリオンを出し杖先を下に向け魔力スフィアを集結させていく。

「ブ、ラ、ス、ト、オ、オ、オ、オ、オ、オ、  
……………！」

「ちよつと待て！」

シンは断末魔を上げることなく桃色の閃光に包まれた、服の事は気付かなかつたのに理不尽なと感じながら。

「 ハート ...」

砲撃を受けたシンは煤だらけになつており涙目になつていた。

「当然の報いです、女性の体を触るといつのはこいつ事です」

「王立ちしながら言つが。

「自分はどうなんだよ ..... ほとんど際どい格好で寝てたくせに...」

「何か言いましたか？」

「いえ何も」

「これ以上掘り返したらさすがに自分の身がもつと危険に曝される、  
そつ感じこの話は終わらせた。

「それでこれからビーする？」

朝食も昨夜の魚に軽く火に曝してから食べ終えた、シンはこの惑  
星になぜ怪獣がいるか調べなければならぬ。

「 ..... 着いていって ..... よろしいですか？」

その間にシンは答えが決まつっていた。

「 もちろん、いいぜ」

行く宛ても目的もない状況、彼女を放つておくことができないシンは了承した。

「さて、飯も食い終わったからな、行こ」

ウルティメイトブレスレットからウルトラゼロアイを取り出すが。

「海が……！」

目の前で海面が泡を吹いていた、シンは海に手を入れるがすぐに抜いた。

「熱い……沸騰しているのか」

「海底火山が噴火をしたのでは？」

様々な推測をするが、海を沸騰させているものが海中から姿を現した。

「ガゴオオオオオオツ！－！－！－！」

黒い体に側面はあるで舌のような皮膚にマグマが光るように所々が赤く光っており胸に赤く光る丸い角が付いたコアが浮き出でおり正面はダークブルー、黒の模様が入り赤く、肩に二対の角、背中に上から下に掛け長さが小さくなつていく背鰭に左右にと後頭部に生えた大きな角、口に生えた長く鋭い牙の怪獣が浮上してきた。

「ラグラスエヴォ！」

進化怪獣ラグラスエヴォ、この怪獣は冷凍怪獣ラグラスが溶岩怪獣グラゴンの、今自分の胸に浮きでている背中にあつたコアを捕

食しその能力を取り込んで進化した姿だ。

「朝のラジオ体操がてら相手してやんか」

ウルトラゼロアイを持った右腕を伸ばし。

「デュワッ！」

それを着眼するとレンズから火花が回転しながら散りスパークする。

回りに赤と青の光の線とゼロスラッガーが乱舞していく頭から足に掛けて元の姿に戻っていく。

「ディアツ！」

両腕を左右に広げ拳が上に向くように曲げるとどんどん巨大化していきラプラスエヴォと同じぐらいの身長となつた。

シンは元の姿であるウルトラマンゼロに変身を遂げたのだ。

「ウルトラマン……ゼロ」

シユテルは静かに呟くとゼロは走りだしラプラスエヴォに掴み掛かる。

「ゼエイー！」

チョップを胸部に食らわすがダメージは効いておらずラプラスエヴォに殴り飛ばされ海面に倒れ水没きを上げる。

「強い……！」

ラゴラスエヴォの強さに驚愕していると次の攻撃を仕掛けるためゼロに接近するラゴラスエヴォ。

「うへー、おまえ、うへー。」

立ち上がるうとすると頭を驚撃みにされ無理やり立たされるとラゴラスエヴォはゼロの鳩尾に拳を何回も打ち込んでいくと頭から手を放し右腕を掴み軽々と持ち上げ投げ飛ばした。

「グアアツ！？」

倒れたゼロの腹に大きな足で踏み付け海底に沈めようとする。このままではやられると察するがこの状況をどう打開すればいいかが思い付かなかつた。

だがその考える暇さえ与えてくれないラゴラスエヴォは踏み付けをやめない。

「グゴオオオオオオオツ！！！！！！！」

何度も踏み付けていく。

胸のカラータイマーが青から赤に変わり点滅を始めてしまう、これはエネルギーの残りが少ないと危険信号だ。

光が吹き飛ばした。

ゼロは起き上ると隣にシユテルがルシフエリオンを持ち浮遊し

ていた。

「あれだけ言つておきながら苦戦するなんてだらしないですね」

ゼロに向かつて毒を吐くシユテル。

「うむせえー 放つておけよー。」

性格上それには速ギレ、立ち上がるときシユテルも合図させて高い位置を飛ぶ。

「フツ……まあいい」

一度鼻で笑うと鼻の下を右手の親指で搔く。

「一緒にやひひばり シュテルー。」

「はー、シン……ウルトライマンゼロー。」

初めて互いの名を呼び合い起き上がるリラックスエヴォを睨む、ゼロは左手の平を広げ左腕を伸ばし右腕を曲げて手を拳にすると拳法家のような構えを取る。

「デヒヤアアアアツー。」

まず最初にゼロが走りだしラゴラスエヴォに突貫、また性懲りもなくと迎え撃とづと口内に青い光を溜めてからそれを冷凍光線にして打ち出した。

「ゼアツー。」

ゼロスラッガーを投げ付け光線を切り払いさせると飛び上がりそのゼロスラッガーを足場にして高くジャンプし頭に戾つてくると右足に炎が纏い強烈なキック、ウルトラゼロキックを炸裂し急降下していき。

「グゴオオオオツ！…！？」

ラゴラスエヴォの鼻先に命中し大きく吹き飛ばした。

「次は私が行きます！」

シユテルの足下に桃色の魔方陣が現れると回りに無数の魔力スフィアが形成されていき。

「パイロ……シユーター！」

その魔力スフィアを打ち出し立ち上がったラゴラスエヴォの回りを飛び交い身動きを取れなくする。

「ガガツ！？ ギヤオツ！？」

下手に動くと飛び交う魔力スフィアに激突し爆発が起り吹き飛ぶと更にまた魔力スフィアに激突と繰り返していくとラゴラスエヴォはよろめく。

「散々いたぶつてくれた礼、ここでしてやるぜー！」

左右の角を掴み勢いよく引き顎を膝に当てるといふとラゴラスエヴォは後退り更に上段回し蹴りを連続で何発も顔面の側面に浴びせていく。

「おつ」

ゼロはしゃがむとラゴラスエヴォはそのまま踏み潰してやううと足を大きく上げたのだが。

「ブラスト…………ファイアアアアアアアアアアーツ！－！－！－！－！－！」

桃色の砲撃が胸に直撃と同時にゼロは腹にパンチを炸裂し大きくラゴラスエヴォを吹き飛ばす。

「ガ」「オオオオオオオオ  
.....」

ゼロスラッガーを投げラゴラスエヴォの左右の角を切り落とすと  
戻ってきてから左腕を広げ水平に伸ばし。

— テヤッ！！

腕を「し」字に組み薄いオレンジ色に輝く光線、ワイドゼロショットを放つとラゴラスエヴォの口内が青く、胸のコアは赤く光りそこからそれぞれ光線が放たれた、

コアからは熱光線が放たれ、二つの光線は混じり合い超温差光線として放たれワイドゼロショットを一瞬にして蒸発させてしまった。

「ワイドゼロショットが.....！」

まだ切り札があるんだと言わんばかりなラ「ラスエヴォは嘲笑う  
ような鳴き声を上げる。

「ゼロ、力を合わせましょ」

「そうだな！」

ゼロスラッガーが乱舞し両手で掴むとカラータイマーの左右に装着する。

シユテルの足下と目の前に巨大な魔方陣ができ、目の前の魔方陣に魔力スフィアが形成されていく、プラスチックアイヤーより巨大な。

「集え明星……すべてを焼き尽くす焰となれ…………！」

ルシフェリオンは上に向くよつに掲げている、杖先は変化し桃色に輝く羽根が展開されている。

ゼロスラッガーは青く輝いていき光エネルギーを集結させていく。ラゴラスエヴォはもう一度超温差光線を放とうと口と口アにエネルギーを集結させる。

「ルシフェリオン！」

ルシフェリオンの杖先を目の前の魔方陣に向けるとゼロは両手を広げる。

「ブレイカアアアアアアアアアアアアアアアアーツ…………！」

「ゼエヤアアアアアアアアアアアアアアアアーツ…………！」

プラスチックアイヤーより巨大な砲撃ルシフェリオンブレイカーと胸に装着したゼロスラッガーから放たれる青白く輝く必殺光線、ゼロツインシユートが同時に発射された。

ラゴラスエヴォも超温差光線を放つたがそれすら蒸発させる威力に増した二人の同時攻撃には為す術なく光線が直撃した。

「ガアアアア…………「オオオオオオオオ…………！」

光線が止まるとラゴラスエヴォは動きを止め粉々に大爆発を起こし倒された。

「フツ」  
「フフツ」

ラゴラスエヴォを倒し互いの顔を見合せ鼻で笑うとゼロの体に光りが纏い等身大となると近くの小島に降り立ちシンの姿に戻りシュテルもその島に降りる。

「倒しましたね」

「ああ…………たく俺一人でも十分だったのによ  
「どこですか？ 自分から一緒にやろうと言いだしたのに」

互いに皮肉を言い合つがそれをおかしいと思つたのかクスッと笑い。

「だけど大した奴だよ、お前は  
「あなたこそ」

シンはウルティメイトブレスレットからウルトラゼロアイを取り出す。

「おいシユテル」  
「はい、何でしうか？」

「俺の……いや、俺達の仲間になれねーか？」

「あなたの……ですか？」

海の近くまで歩いて背を向け振り向く。

「ああ、俺達、宇宙の平和を悪から守るウルティメイトフォースゼロのなー！」

「…………悪くないかもしませんね」

「じゃあ決まりだな、手始めにこの惑星になんで怪獣がいるのかを

調査だー！」

「かし…………いえ、了解」

ウルトラゼロアイを着眼して等身大のゼロに変身するとシユテルと共に舞い上がりこの惑星の空を駆け巡るのだつた。

To the Next Episode . . .

## Episode .02 ゼロと星光（後書き）

次回はミリーナイト編に移行します。

ゼロとシコテルは力押しという組み合わせですかね？

近いうちウルティメイトゼロが出るかも…………結構それに心が！

次回予告

ミリーナイト

「Iの怪獣達は一体……」

レビィ

「光翼斬！」

ミリーナイト

「大丈夫ですか？」

レビィ

「う～ん～…………わからない！」

ミリーナイト

「あの甲冑は一体…？」

レビュー

「ミラーナイトー」

次回『Episode・03

』  
『在の惑星での激闘

』

## Episode · 03 岩の惑星での激闘（前書き）

今回は登場怪獣がいつもより多いです。  
組み合わせにこだわりや覚えているかと並びのまで。

### 登場怪獣

どぐろ怪獣レシドキング  
有翼怪獣チャンドラー  
地底怪獣マグラー  
円盤竜ナース  
地底ロボットコートム  
岩石怪獣ガクマ  
岩石怪獣ガクマ  
戦神ギルファス  
登場

## Episode · 03 岩の惑星での激闘

Episode · 03

### 岩の惑星での激闘

ここは惑星アクアスある太陽系内にある岩の惑星イメル、この惑星はこの宇宙で動力として使われているエスマーラルダ鉱石以外の様々な鉱石が発掘されるのに有名な惑星。

この惑星にもベリアル軍の残党が潜伏していると報告がありウルティメイトフォースゼロの一人、銀色の体に緑の模様が入り黄色く輝く十字の眼をした巨人、鏡の騎士ミラーナイトが黄色い皮膚の大きな体の一足歩行の怪獣、どくろ怪獣レッドキングと黒い四足歩行の怪獣、地底怪獣マグラードと両手が羽根の有翼怪獣チャンドラーと対峙していた。

「この怪獣達は一体……」

怪獣の事はゼロから聞いているが種類は詳しく聞いていないが自分に敵意を向けているのは分かった。

「戦うしかありませんね…………」

構えると怪獣達は身構える。

「ギヤオオオオオツ！……！」

チャンドラーは羽根をばたつかせ突進していくが//ラー・ナイトは軽々と高くジャンプして飛び越える。

「//ラー・ナイフ！」

両手から連続で放つ手裏剣光線//ラー・ナイフをマグラードに向け放ち背中に命中する。

「ガアツ！？」

マグラーは苦痛の声を上げると//ラー・ナイトはその背中の上に着地する。

「ギヤオオオオツ！……！」

チャンドラーがまた突進していくが高く飛び上がりマグラードを引っ掛け崖に激突し倒れる。

「ガゴオオオオツ！……！」

マグラードは走りだし//ラー・ナイトに飛び掛かるが避けられレッドキングに激突。

「ギャシャアアアアーッ……！」

レッドキングの怒りを買ひマグラーは首を捉まれ腹を連續で殴られ手を放すと尻尾を掴みミラーナイトの方へ投げ飛ばす。

「ハツ！」

だが素早いミラーナイトは即ちマグラーは塵に激突しチャンバーを下敷きにする。

「単細胞ですね～……もう少し勉強をした方がよろしいのでは？」

両手を広げて首を傾げながら言ひ、その言葉は理解したレッドキングは怒り狂い殴り掛かる。

「速い！」

怒り狂い力任せに拳を振るレッドキングの攻撃を繰り出すスピードが速くなつてありミラーナイトと互角となつていた。

「余計なことをしてしまいましたか……」

自分の発言に後悔するが仕方ないと構えるとレッドキングは怒りに任せてミラーナイトに襲い掛かる。

「くつ……！」

レッドキングの攻撃を紙一重の所を避けていく、生物の本能と怒りがこれほどまでに恐ろしいと感じつつ打開策を練つていく。

レッドキングから離れれば攻撃できまいと考え飛んで後退するが

その考へが甘かつた。

「ギャオオオオオオオツー！……！」

「つー、ミラーナイフー！」

なんと近くに突き出でていた岩を圧し折りそれを投げてきたのだ、その岩をミラーナイフで破壊するが更にレッドキングは口から小さい岩石を吐いてきた、ミラーナイトはそれを飛んで避け岩石が地面に当たると爆発した。

「あの岩石は爆発物ですか…………これは厄介…………！」

爆発物である岩石を吐けるレッドキングは装甲怪獣とも呼ばれている、その装甲怪獣レッドキングと戦ったウルトラマンマックスは苦戦を強いられた事がある。

ミラーナイトはこのままでは危ないと感じどうにかレッドキングを倒すための作戦を考えているとレッドキングの首に電気が走り火花が散る。

「誰だ…………ー？」

新手かと思い警戒するが違つた、レッドキングの背後を浮遊する水色の長いツインテールの髪に赤い瞳、八重歯と黒いレオタードを着て腰にスカートみたいなものを巻き青いマントを身に付け黒い斧のような杖を持つた実にスタイルがいい女性がいた。

「女性…………！」

驚かずにはいられなかつた、レッドキングはその女性に目標を変え振り向く。

「」に向いた！ ピーしー！」

女性は斧を握るとそれから三日月状の金色の刃が出現し。

「光翼斬！」

斧を振るい三日月状の金色の刃がブームランのように放たれレッドキングの左肩に命中しそこから流血し苦痛の鳴き声を上げる。

「効いた！」

ダメージがあるのに喜ぶのだが//リーナイトは。

「危ない！」

走りだし高く飛び上がりレッドキングと女性の間に立つと。

「ぐわあつー？」

「えつ…………！」

レッドキングは痛みのあまり暴走し//リーナイトの右肩を殴る。

「くつ……ハツ！」

//リーナイトはレッドキングを蹴り飛ばす、そのレッドキングは崖に激突しチャンドラーは下敷きになり。

「シルバー…………クロスー！」

痛みに耐えながら両手をクロスし光を集めて腕を広げて放つ十字手裏剣の光線シルバークロスを放ちレッドキングに命中。

レッドキングは体内の爆発物である岩石が爆発していくチャンドラーとマグラードを巻き込み大爆発を起こした。

「うわあああああ～！？」

女性は吹き飛ばされてしまうが素早くミラーナイトは手の平に乗せ爆風から守り抜くと力が抜けだんだん等身大サイズに縮小していきシンと同じ服装で銀髪の瞳の色が金色の清々しい青年の姿となり女性を抱き抱えたままゆっくり地面に降りる。

「大丈夫ですか？」

「う、うん……ありがと」

ミラーナイトの青年は女性を下ろすと微笑む。

「あなたのお名前は？ 私は先ほどの姿ではミラーナイト、この姿では……騎士鏡矢(きし きよつや)と名乗つておきましょう」

「僕の名前は雷刃の襲撃者！ レヴィ・ザ・スラッシュヤーって名前だからレヴィって呼んで鏡矢！」

彼女はシュテルと同じ闇の書から生まれたマテリアル、だが彼女もまた10歳ぐらいの少女の姿から20歳ぐらいの女性の姿となつていた、バリアジャケットはそのままだが。

「かしこまりました、レヴィ、ところであなたはこの惑星の住人ですか？」

「うーん……わからない！ 近くを飛んでいたら君がさつきの奴に負けてるの見て放つておけなかつたから……」

「そりですか、おかげで助かりました、ありがとうございます」

鏡矢は膝を付いてしゃがみレヴィの手を取りその手の甲にキスをした、これが自分なりの女性に対する礼の仕方なのだ。

「い、いいよ……だつてその所為で鏡矢の肩……」「

少し照れながら言う、立ち上がる鏡矢の右肩から血が流れ着ている服に染み付いていた。

「大したことありませんよ、あなたみたいな綺麗なお方を守れたのですから」

「き、綺麗!…?」と顔を赤くしながら飛び跳ねて更に照れるレイ。

「本当の事ですよ?」

「う、うん……ありがと?」

真に受けているが鏡矢も正直な感想を述べたのだ、彼女が本当に美しいから。

「この惑星の住人ではないとするどこのか他の…………困りましたね…………この惑星は怪獣が沢山いて危険だと言うのに…………」

「そんな事言わても?…………」

「失礼いたしました、それでしたらこの惑星に滞在する間、ウルティメイトフォースゼロの一員である私があなたをお守りいたします

自分の発言が失言なものと感じ謝罪をするとレヴィを守ると騎士の誇りに掛け誓い、ウルティメイトフォースゼロのことを説明する

鏡矢。

「それじゃ……お願いしようかな?」

「かしきまりました、レヴィ」

一礼するとまた微笑む。

「鏡矢の笑顔…………素敵だね」

「ありがたきお言葉です姫様」

「姫様!?」

「あ、失敬、つい癖として」

自分がエスメラルダ星の騎士でその星の姫・エメラナ等に讃められる際に使う言葉だと説明した。

「ふーん……ならここにいる間は僕が姫様だね!」

屈託がない純粋な笑顔で返す、その笑顔を見て。

「そうなりますね」

その言葉に同意する鏡矢はとても嬉しそうだった、ベリアル軍を壊滅させてから一ヶ月、エメラナとは会っていないからだ、レヴィはエメラナとは違うがとても無邪気な所を見て和んでいた。

「では参りましょうか姫様?」

「うん!」

鏡矢はレヴィの手を取ると二人は歩き出した。

「鏡矢、やっぱ大丈夫？」

「大丈夫ですよ、心配は要りません」

肩の傷が目立つのか心配そうなレビイ。

「そりゃればレビイは私と会う前は何を？」

「鏡矢と会つ前は…………闇の中に帰ろうとしてた」

「闇？」と返し深く聞いてみる。

「僕は闇の書の欠片から生まれたから…………」

シユテル程詳しい説明ではなかつた誰でも分かる説明で鏡矢は話を聞く。

「だから闇を求めてた、だけどやっぱり邪魔されちゃつて消えたと思つたらここにね」

「そうだつたのですか…………この惑星で私と会う前は？」

「小さい怪獣と会つたんだ、赤くて僕と同じ身長ぐらいのね、その住み家にも行つて僕はこうして見回りをね」

見回りをしている途中にハーナイトが戦っている所に遭遇し、騎士鏡矢と出会えたのだ。

「これからどうよつかな～…………やつだ！ ピグモン達の所に案内しようか？」

その自分を助けてくれた怪獣の名前はピグモンらしい。

「せしたらよろしくお願ひします、レヴィ」

辺りは暗しきないが空だけは青く澄んでいた、何か飛んでいたら見れるぐらい。

「ん？ 鏡矢！ アレ！」

レヴィはその澄んだ空に写る影を見つけ指を差した。

「アレは……円盤……」

その影はみると内に近付いていきそれは金色の円盤だった。円盤は傾き竜のような頭と上部を見せそこからレーザーを放ち地上にいる鏡矢とレヴィに攻撃を仕掛けた。

「ひゃあっー？」

「くつ……」

「庇うよつてレヴィの後ろを走り岩陰に隠れる。

「あなたはここで待っていてください」

「だけど鏡矢！」

服に染み付いた血はみるみる幅が広がっていき痛々しく見えた。

「先ほども言いましたが大丈夫です、」安心を

両手をクロスし精神を統一すると田の前に光り輝く十字の鏡が現  
れ。

「ミラー…………チエンジー！」

両手を広げその鏡の中に飛び込むとその鏡は消え代わりにもつと  
巨大化した鏡が出現しそこから鏡矢の元の姿でもあるミラーナイト  
が拳から出てきて全身が飛び出てきて両手を水平に広げ岩の大地に  
着地した。

「ギシヤアアアアアアーツ…………！」

円盤は蛇のような姿に変化し手足が生えてきた、この怪獣は宇宙  
竜ナースである。

「ミラーナイフ！」

素早くミラーナイフを炸裂するがナースは鞭のようにしなやかに  
動き光線を避けると目から怪光線を放ち攻撃、ミラーナイトはバク  
転し怪光線を避けるが次から次へと放たれていき側転して避けてい  
く。

「これでは拉致が開かない…………」

一瞬考えたがその隙を突かれナースに接近を許してしまった。

「しまつた……ぐああつ！？」

〃リーナイトはナースに巻き付かれ拘束されてしまった。

「ぐつ……」

「鏡矢！」

レビィは心配で前陰から出てきてしまつたがそれは要らなかつた。

「シルバー……！」

両手を無理やり動かし交差すると輝き。

「クロス！」

両手を少し広げるとシルバークロスが放たれナースはバラバラに切り裂いた。

「ふう……」

バラバラになつたナースを見て一息を吐くのだが、突然地響きが起ころ。

「今度は何……！？」

すると大地は割れ一体の四足歩行の岩山のようで片方は角が一本、もう片方はV字に開いた一本の角が生えた岩石怪獣ガクマが現れた、角が一本はガクマ、二本はガクマである。

「また怪獣…………！」

「ガゴオオオオオオオオオオオツ…………！」

「グゴオオオオオオオオオオオツ…………！」

ガクマ達は遠吠えを上げて走りだし同時にミラーナイトに飛び掛かつた。

「うぐつーー？」

側転で避け身構えると右肩に激痛が走り膝を地面に付く。

ガクマは口から青い光線を放つ、ミラーナイフで受け止めるのだが。

「ミラーナイフが…………！」

ミラーナイフは岩となり崩れた、ガクマの能力に冷や汗をかく気持ちに見舞われると次はガクマが光線を放つてくる、それを左に飛び込んで避ける、右肩に負担を掛けないために。

「ミラーナイフ！」

ミラーナイフをガクマに直撃させるが岩のような硬い皮膚の前にはダメージがなかった。

「硬い…………よしー！」

そこでミラーナイトが作戦を思い付きそれを行動に移した。

「もしかして…………自分の攻撃が効かないなら…………」

レヴィはミラーナイトの作戦が何なのかが判つた。

「ガゴオオオオツ！！！」

ガクマは光線を放つて、いきミラーナイトを追撃するが避けられていく。

ミラーナイトは側転をして、いき光線を避けて、いきながらガクマに接近していく。

「グゴオオオオツ！！！」

ガクマも光線を放つ、その攻撃も紙一重の所を避けていく、チャンスを伺いつつ。

「そろそろだな……」

ガクマ達が向かい合い、間にミラーナイトは立つと口は光りだす。

「つ！ 今だ！」

ガクマは光線を放つを止めたが、遅くミラーナイトは飛び上がりガクマの攻撃を避けると、ガクマに光線が直撃し石化してしまった。

『よしー。』

二人同時に声を上げると、ガクマは同胞を自ら撃つた事に怒りだし、ミラーナイトに光線を放つが。

「ディフェンスミラー！」

十字のマークが何個も付いた光り輝く鏡の壁、ディフェンスミラーで光線を弾き返しガクマに直撃しそれも石化する。ミラー・ナイトは一体のガクマが並んで立つ位置に移動し両手を交差し。

「シルバー…………クロス！」

シルバークロスを炸裂し石化し並んで立つガクマ達を貫きバラバラに砕け散り撃破した。

「鏡を使うのは得意でね…………知らなかつたかい？」

両手を広げそう言いレヴィを見る。

「やつたね鏡矢！」

その言葉に領き鏡矢の姿となろうとしたその時だった。

「ぐわあつー？」

背中に火花が散り前のめりに倒れ膝を付く。

「また怪獣！？」

巨大な岩の陰から石像のようにも見え頭部に長い刀が装着され胸に赤く輝く発光体が付いた巨人が現れた。

「なんだあの甲冑は…………！？」

その甲冑の巨人の名は戦神、ギルファスである。

「…………」

ギルファスは重苦しい機動音を上げながらミラーナイトに接近する。

ミラーナイフを放つがギルファスの装甲を貫けない、もう一度放つが効果はなく接近を許しアームハンマーによる重い一撃を右肩に振り下ろした。

「グアアアアアアアアツ！――！――！――！――！」

怪我をしているため効果は増してありミラーナイトをひざまづかせるには十分の威力だった。

「ぐはっ！？」

しゃがむミラーナイトを太い足で蹴り飛ばし胸から火球を連射し連続で攻撃を浴びせていく。

「ぐつ……ガアツ！？」

火球攻撃で動けない所を踏み付けていき追い討ちを掛け、ミラー  
ナイトは腕を上げるが。

「う…………！」…………まで…………か…………」

眼の輝きは失い腕が下がつ//ミラーナイトはその場から姿を消した。

「鏡矢…………！」

ギルファスはミラーナイトが消えたのを確認するとその場から歩き去る。

「そんな…………あぐつ！？」

背後から首を殴られレイは氣絶し右手が銃で左手がハンマーの地底ロボットコートムに担がれ運ばれていった。

To the Next Episode . . .

## Episode · 03 岩の惑星での激闘（後書き）

次回は…………アホの子がね～  
ギルファスはウルトラマンマックスに出た怪獣です。

次回予告

レビ

「怖いよ…………助けてよ…………」

鏡矢

「私を待つている方がいらっしゃるので」

レビ

「大丈夫じゃない！ そんな辛そうな顔して…………」

鏡矢

「今は、あなたは私の姫様なのですから」

次回『Episode · 04 騎士の誓い』

## Episode .04 騎士の誓い（前書き）

今回は少なめかな？

ミリオーナイトに独自設定を付けました、後オリジナル？必殺技が……オリジナルじゃないですが、緑川光さんの代表するキャラクターの技です。

登場怪獣

地底ロボットコードトム

どくろ怪獣レッドキング雄

どくろ怪獣レッドキング雌

戦神ギルファス

土塊怪獣アングロス

登場

「……」

ギルファスに敗れたミラーナイトは鏡矢の姿となり気を失つていた、気が付くと洞窟の中に横になつており起き上がり回りを見渡す。

「そうだ……レヴィイが……！」

思い出し立ち上がつてレヴィイを探しに行こうとするが右肩に激痛が走り座り込む。

「傷が……」

戦う前よりも傷は酷くなつており腕が思つよつて上がらなかつた、肩が外れていようつだった。

「ピグ？」

奥から赤い小さな怪獣が出てきて顔を見せた。

「君が…………」「ままで？」

赤い怪獣は頷くと鏡矢の手に触れる。

「………… もうか、君の名前はピグモンって言つのですね」

「ピグ！」と友好珍獣ピグモンは元気よく返事をした、レビイが赤い怪獣と言つていたのを思い出しこのピグモンが助けたと察した。

「ありがとうございます、ピグモン」

「ピグ！」

鏡矢はその場に座るヒピグモンも座り再び手を触れる、すると頭の中にこの惑星イメールで何が起きたのかテレパシーが送られて知る、数日前、ピグモンはこの惑星に元から住んでいたが突然謎の宇宙船が何機も飛来して凶暴な怪獣達を投下していったらしい。

「そうだったのか…………」

「ピグ…………ピグ……！」

するとピグモンは何かを察し奥へ行くように進める。

「奥に…………」

そのままピグモンに誘われ奥に進んでいくと四足歩行でモグラのようでシャベルのような前足で眼が赤く光り鼻先にドリルのような角が生えた土塊怪獣アングロスが壁をドリルで突き破り頭だけを覗かせた。

「ああいつ風に怪獣が…………」

ピグモンが先頭を歩き込んだら奥へ、すると光が見え出口を出る、そこには広がるのは沢山に囲まれた空間で上を見上げれば空が広がつており回りをよく見ると同じような出入口が空いておりピグモンも沢山いた。

「ピグ」

そこに髪を生やしたピグモンがやつてきた、このピグモン達の長だつ。

「ピグ」

長老ピグモンとピグモンは手を触れ合い何が起きたのかをテレパシーで教え合つ。

その刹那、崖の下の地面から赤いレッドキングと黄色いレッドキングが姿を現した。

「怪獣！」

鏡矢は身構えたがピグモンに止められまたテレパシーで。

「…………そつか、宇宙船で連れてこられた怪獣達はみんな凶暴じやない、中にはあのよつて平和を愛する心優しい怪獣もいる、その怪獣達と協力して君達はこの住み家を…………」

長老ピグモンは頷くとピグモンに何かを命令しおつていった、下の赤いレッドキング雄と黄色いレッドキング雌は座り込んで休んで

いた、ここでの用心棒を勤めているのだろう。

余談だがこのレッドキング達はパワードレッドキングと呼ばれる種類である。

「ピグ」

またピグモンは先頭を歩き後を歩くとだんだん下に降りていく。

Episode · 04

騎士の誓い

「んん…………」

どこか暗く冷たい空間の中、回りを見渡しても何も見えず感じるのは恐怖しかなかった。

「怖いよ…………助けてよ…………」

自分はもしかしたらこんな冷たい闇の中に帰らうとしていたのか  
と思い始めた、温かい闇の中に帰ろうと闇の書の復活させるため  
に頑張った、だけもしかしたらこんな冷たいものだったのかも  
しない。

「鏡矢…………助けてに来てよ…………」

今自分は片隅にいるのは分かる、その片隅で膝を抱えて座る、どこだか分からぬ暗闇の中で。

すると突然灯りが点き辺りが見渡せるようになる。

「僕、捕まっちゃったんだ」

田の前には鉄の棒が隙間が細くなるように並べられ出れなくなつており確實に拉致され横にはコートムが見張りをしていた。

「バルニフィカスは…………！？」

手元に自分の杖、バルニフィカスがなく立ち上がり通路側に近寄り辺りを見渡すと自分が入っている檻の前の檻の中に何かの液体が入ったカプセルの中に入れられたバルニフィカスが見えた。

「そんな～…………」

策は尽きガックリと下を向くと鳴き声が聞こえた、よーく他の檻を見ると中にはピグモンが入っていた。

「もしかして…………」の星に住んでるピグモンがこいこい…………

彼女の言つ通りこの牢屋にはこの惑星に住んでるピグモン達が拉致されている、何かの実験か奴隸として扱うのだろう、レヴィはこの檻からどうやって脱出するか考えたが。

「…………あ、ー！　ダメだー！　考え方かなーい！」

基本この子はアホの子である。

「ひつひつ頭を使う事はシユテルが一番なんだけどな～」

口を尖らせなんで今いないんだうとグチグチ言いながらまた座り込み後ろへ倒れ大の字に寝転んだ。

「鏡矢…………大丈夫かな…………あんな怪我だし助けにこれない……いや、もしかしたら勝てないから見捨てたかも…………」

正直、鏡矢と出会った間もない、完全には信用できない部分もある、今の状況を考えるとマイナスの方向に考えてしまつのも心理上無理はない。

「シユテル～王様～助けてよ～」

シユテル以外もう一人のマテリアルの名前を口に出すレヴィ、左右を「ロロロロ転がるとマンドが絡んでくる。

「寝よひ」

考えても何も思い付かないため寝る事にした、十分体力をセーブし蓄えておこうと。

「助かりました……ありがとうございます、ピグモン」

その頃鏡矢はピグモン達の手厚い看護を受け傷の手当てをしていた、薬草等を磨り潰してそれを傷に塗り自分が身に付けていた服の袖を破りそれを包帯として使う、外れていた肩も入り十分動かせるようになっていた。

「では私は

手当てが終わると立ち上がり住み家から去りつゝピグモンに止められた。

「いえ、私を待っている方がいらっしゃるので必ず必ずはしていられません」

軽く微笑むと両手を交差させる。

「傷の手当てしてもらいありがとうございました、必ずお礼しますので、では

田の前に鏡が現れ。

「//トー…………チハノジー！」

その鏡の中に飛び込むとそれは消えるのだった。

「さて、どこから探しようか……」

ミラーナイトは鏡や光を反射する物がある場所ならどこでもテレビポートができる能力がある、今いる場所はテレビポートする時に通る空間の狭間だと考えればいい。

「……次あの巨人が現れたら勝てるのでしょうか……」

ギルファスの事だろう、あの分厚く硬い鎧に自分の攻撃が通用するか、素早さには自信はあるが力には自信が余りない、だが作戦がないわけでもない。

「アイアロンを倒した戦法を使ってみましょう

鋼鉄将軍アイアロン、カイザーベリアルに仕えていた手下でミラーナイトが倒した者だ。

「これは……」

怪しげな光を反射する場所を見付けそこに飛び出た、光を反射する物はコートムであり突然現れた等身大のミラーナイトに銃を向けるが。

「//ミラーナイト！」

//ミラーナイトを全身に浴びコートムは機能を停止し倒れた、その近くには壁に設置された金属の扉がありそれも光を反射している。

「//ここからな」

鏡代わりとなっている金属の扉の中に入りまた空間の狭間を通りその扉の向こう側に出て施設内に入る。

「何の施設なんだ……」

//ミラーナイトはゆっくり歩き辺りを警戒しながら通路を進んでいくと広い空間に出る。

(//ここは…………採掘場…………)

そこでは様々な鉱石を拉致したピグモン達にコートムの監視付きで発掘させていた。

(酷い…………)

ピグモン達は弱つており一度止まればコートムが電撃を放ち無理やり労働させていた。

「まずはこのロボット達の機能を停止させなければ、どこかにメイ

ン・コンピュータがあるはず、そこで制御ができるはずだ

//ハーナイトは鏡の中に隠れつつ施設内を駆け巡る。

(レヴィ、無事でいてください……へ、もう傷が痛みだして……)

手当てしたからとすぐに治るわけもなくこんな激しく動いていたら手当てして治るものも治らない、だが立ち止まるわけにはいかない、騎士としての誇りと誓いがあるから。

(守ると誓った……それなのに守れていなくて惨めなんだ俺は……！)

守れなかつた事を悔やみ、戒め、一人称が俺と変わる程だった、元は俺と言っていたがエスメラルダ星の騎士になる時に私と言つようにしていたからだ。

(必ず助けださなければ、彼女を)

施設内を駆けているとモニターが置かれた部屋に入る、その一つのカメラはコートムが映し出しているものだった。

(レヴィー！)

その映像の一つにレヴィが映し出され早くコートムの機能を停止させようとしたのだが。

「見付かったか……！」

「コードームが数機部屋に入り銃を向け発砲してきた。

「ディフェンスミラー！」

ディフェンスミラーを張り銃撃を防ぐとシルバークロスでコードームを破壊する。

「てめー等の相手している暇はねーんだよ！」

口調が荒くなっていた、焦る事により素に戻ってきていたのだ、ミラーナイトはキーボードを操作し施設内の見取り図を表示、牢屋がある場所を覚えるとコードームのすべての機能を停止させる。

「これで……！」

再び鏡の中に入り移動を始めた。

「あれ？ 口ボットが動かなくなつた？」

牢屋の見張りのコードームが急に動かなくなり倒れるのを見る。

「だけどバルニフィカスがないと檻が破れない！」

万事休すかと思い後ろへ倒れると。

「シルバー…………クロス！」

光り輝く十字の手裏剣が上下に並び一直線に飛んで向かい合い並んだ檻の鉄格子を切り裂いていき外に出られる程の間が開く。

「ピグ？」

拉致されたピグモン達は疑問符を浮かべながら次々と出ていく通路の入り口に立っていた青年に礼を言いつつ牢屋から出していく。レビも檻から出るとその通路に立っていた青年を見て驚きの声を上げた。

「鏡矢！」

騎士鏡矢が立っていたからだ、鏡矢は走って近寄り床に膝を付く。

「申し訳ございませんでした、守るとお約束しておきながら守れずみすみす敵に拉致させられてしまつ事態に陥らせてしまつた事を」「い、いいよそんなに愚まらなくて……それに……そんな傷で……」

包帯として巻いていた裾は血が染み付いていた、手当てした傷を開いてしまつたのだろう。

「いいえ、大丈夫です」

「大丈夫じゃない！ そんな辛そうな顔して……助けられてもちつとも嬉しくないよ……」

レビの言う通り顔にべつとりと苦痛から出る脂汗が流れしており、そして、今にも泣きだしそうな彼女を見て少し行き過ぎたと後悔していたがそうでもなければ手遅れになつていたかもしれない。

「申し訳ございません……ですがこれは誓いなのです、騎士の誇りを掛けた」

「誇りのためなら自分はどうなつてもいいの？ それで死んじやつたらどうするの？」

心からの叫びを鏡矢にぶつける、目には涙が溜まっていた。

「大丈夫……俺は……死なないから」

またもや元の口調に戻っている鏡矢、だがレビィは気付かなかつた。

「ホント？」

上田遣いで首を傾げながら聞いてみると彼は微笑む。

「はい、誇りに掛けて、今は、あなたは私の姫様なのですから」

口調がまた私に戻り檻に入っていたカプセルを破壊しバルーフィカスを渡す。

「なんかヌメヌメしてる~」

「まあそれは我慢しましょ~う」

再びミラーナイトに変身すると。

「では行きますよ」

鏡の中に入り外に出るため移動する。

そして外に出るとピグモン達は住み家に向かつて帰つていった。

「来る…………！」

施設がある崖を崩し中からギルファスが現れた。

「またアイツ…………」

不安そうにミラーナイトを見つめると。

「大丈夫です、次は必ず勝ちます」

優しく語り掛け巨大化していきギルファスと対峙する。

「フッ…………」

構えるとギルファスは胸から火球を放つがディフェンスミラーで受け止める。

「ミラーナイフ！」

ミラーナイフを連射するがギルファスの鎧に弾かれるが狙いがあつた。

「シルバー…………クロス！」

今度はシルバークロスを放つが軽く火花が散り後退る程度だった。ギルファスは頭部の刀を持ちミラーナイトに斬り掛かるがそれを白刃取りされるが力押しで振り下ろそうとする。

「ハアアアアアア…………！」

ミラーナイトは足を踏ん張らせ刀を上へ持ち上げていく。

「鏡矢！ 頑張れ！」

レビイの声援を背に受けそれを力に変え刀を奪い取りそれを自分の武器にしギルファスの胸、ミラーナイフやシルバークロスを当てた所に振るつっていく。

「ハツ！」

できるだけ同じ所に刀で斬り付けていくミラーナイト。ギルファスは腰に掛けていた盾を両手に装備し刀による攻撃を防いでいく。

「厄介な盾だ……だが同じ硬さなら！」

同じ強度を誇る刀と盾、矛盾という言葉は知っているだろうか？ その言葉の元は商人が何でも貰ける矛と何でも防げる盾を売っていたが客に辻褄が合わないと突っ込まれてしまつた事から由来する、ギルファスを矛盾に例えるならば同じ強度の刀と盾がぶつかり合えばどうなるだろうか？

「よし……！」

ミラーナイトがもう一太刀を入れるとギルファスの盾と共に刀は崩れた、刀を奪った時の狙いは違つたが盾を持った時に作戦を練り直したのだ。

(十分傷付けましたね)

ギルファスの胸にできた亀裂を見て内心で笑みを浮かべるとその回りを鏡を重ね合わせた壁で囲むとシルバークロスを放つ、手裏剣はギルファスの胸に命中すると弾かれ回りの壁にぶつかり反射してまた胸に命中していく。

「…………」

ミラーナイトは時が来るまで待つていた、トドメの一撃を決めるための準備をしながら。

手裏剣は反射していく何度もギルファスの胸に命中していくと遂に。

「鎧を貫いた！」

手裏剣はギルファスの胸を貫き鎧全体に鱗が入つた、ミラーナイトはこれを狙つていたのだ。

「よし！ シルバー…………クロス！」

再びシルバークロスを放つがそれは通常よりも巨大なものだつた、ミラーナイトは走りだすと飛び立ち飛行、

そのシルバークロスに突貫すると自分の飛行速度により加速し、今の状態は鏡を纏っているのと同じで太陽の光が反射し輝きを増し

ついでに、流星にも見える光の矢、もしくは光の鳥となり、ギルファスに突撃していく。

ギルファスは後退るが動きが鈍いためミラーナイトの必殺技を避けられなかつた。

ミラー・ナイトはシルバークロスと共に敵に突貫する必殺技アカシックバスターを炸裂し亀裂が入ったギルファスの鎧を貫きその背後に立つた。

ギルファスの体に巨大な穴が空きそこから背後に立、ミラーナイトが見えていた、これで勝ったかのように見えたがギルファスはゆっくりと動き出す。

「後はよろしくお願ひします、レビィ姫様」「任せて！」

ミラーナイトの真上には金色に輝く巨大な魔方陣を足下に展開したレビューがありバルニフィカスはザンバーフォームという巨大で長い金色の刃が伸びた形態となっていた。

「碎け散れ！！！！！」

バルニファイカスを振り下げ。

「雷神滅殺！ 極光おおおおおおおおおお斬！！！！！！！」

「……」

そして勢いよ振り上げ右下から左上ににしギルファスを切り裂くと。

「もう一度！」

左下から右上に斜めにもう一度ギルファスを一閃しバルニフィカスを右手だけで持ち刃が上から消滅していくと斜めになつたXの字の切り口から光が放たれギルファスは粉々に砕け散り倒された。

「強いぞ！　すごいぞ！　カツコイイ！　僕達の勝利だ！」

飛んでいるがぴょんぴょん跳ねながら勝ちを喜ぶレビイ、ミラー  
ナイトはそれを見て少し笑うのだった。

「トドメの一撃、お見事でしたよ」

鏡矢の姿となり会話をしていた。

「いや、だけど鏡矢がほとんど倒したものじゃん」

「いえ、それでもお見事でしたよ」

微笑みながら褒める鏡矢、褒められ照れるレビィ。

「ホントはお礼のつもりだったんだけど」

助けられたからだらうかわしきの一撃はお礼であったのだが。

「だけどまだしたりないな」

「いえ、もう十分ですよ」

それ以上のお礼は求めていない、と意味を込めて言つたのだが。

「だからね鏡矢」

「…………んー?」

いきなり抱き付かれ唇を奪われた、少しすると放れ。

「鏡矢は手だつたけど…………僕は唇で倍返しね」

「え…………あ、はい…………」

いきなりのことでもまだ呆然としておりまだ話は続く。

「唇にキスと僕が鏡矢のお嫁さんになることで助けてくれたことのお礼にするね!」

逆プロポーズされ、少し我に返る鏡矢、レビィは子供のような無邪気な笑顔を浮かべていた。

「……………ありがとうございます、レヴィ」

「本気だからね～、忘れないでよ～？ わかった～？」

首を傾げながら念を入れていき喋つていく。

「はい、レヴィ」

鏡矢も本気になつてきていた、短い間、だがレヴィみたいな子供っぽい彼女にとつては気にしなくてもいいものなのかも知れない、恋愛は人それぞれ、言ったもの勝ちなのだから。

To the Next Episode . . .

## Episode · 04 騎士の誓い（後書き）

ミハーナイトの素はサイバスターのマサキ・アンダーですがたまに殺すという実に物騒な事を言つてきます、まあその言われた相手は死にませんが（笑）

そして必殺技がアカシック～……バスター・アーチーでした（爆）オリジナルフォームで魔装騎士モードというのを考えていたり（笑）アホの子テラカワユスで純粋～、シユテルが一番ですが（キラツ）因みにレビィが膝を抱えて座るのはいろんな意味でネタです、綺麗な体育座り。

次回はグレンファイヤー & ジャンボット×ロード編でーす。

次回予告

グレンファイヤー

「寒い～なあ～」

ジャンボット

「甘く見ていいからだ」

グレンファイヤー

「女……？」

ジャンボット・ロード

「「無礼者！」「

グレンファイヤー  
(同時は少しキツいなあ.....)

次回『Episode・05 零下140度の死闘

』

Episode · 05 零下140度の死闘（前書き）

王様とグレンと焼き鳥さん、意外と組み合わせ難しい。

登場怪獣

冷凍怪獣ギガス

凍結怪獣ガンダ一

登場

## Episode · 05 零下140度の死闘

Episode · 05

零下140度の死闘

アクアスとイメールと同じ太陽系内にある氷の惑星コンル、その惑星の大地はほとんどが氷で海の上を歩けるぐらい分厚い氷が張つており氷塊が突き出していた。

氷の大地の上に一機の鳥のような形の白と赤の宇宙船が着陸しておりそこから少し離れた先で炎のような赤い頭に赤く筋肉質の体に銀色の手と足、胸に赤く丸いコアが付いている炎の戦士が雪男のよ

うな筋肉質の体の怪獣、

冷凍怪獣ギガスと鳥に似たような凍結怪獣ガンダーと戦っていた。

「寒<sup>さみ</sup>いーなあー、こんな所にずっといたら死んじまうわ

戦士の名はグレンファイヤー、ウルティメイトフォースゼロの一員だ。

宇宙船の名前は同じくウルティメイトフォースゼロの一員ジャン

バードだ。

「手を貸そうかグレン?」

「あ? このグレン様がこの程度の奴らに負けるとでも?」

ジャンバードの申し出を拒否するとギガスとガンダーに指を向けて動かし挑発する、それに怒る怪獣達、先にギガスがドランシングしてから走りだしグレンファイターに殴り掛かる。

「あらよつと!」

「ガツ!?

腕を掴まれそのまま一本背負いを食らいギガスは氷上に叩き付けられる。

「甘いぜ!」

ギガスに向かつて言つていると背中に白い煙を受ける。

「冷たつ!」

ガンダーの口から吐く冷凍光線が直撃したのだ。

「甘く見ているからだ……ジャンファイト!」

ジャンバードは飛び上がり人型ロボットに変形する、胸部と頭部は白く、眼は黄色、手足は赤く左肩に縦に長い防具、右腕にも同じような防具が装備された、ジャンボットへと変形したのだ。

「ジャンブレード!」

右腕から緑色に輝く剣、ジャンブレードが飛び出しガンダーの相手をする。

「焼き鳥！ 邪魔すんなよ！」

「邪魔はしていいだろ」

グレンファイヤー自身の邪魔はしていない、確かに正論である。

「……勝手にじりー」

腕を回し指を鳴らし首も鳴らすと手を拳に構え。

「俺はこの雪男野郎の相手してやらあー！」

「ガゴオオオオオオオオツ！！！！！！！」

グレンファイヤーとギガスは同時に走りだし手を重ね力と力による押し合いとなる。

「なかなかの怪力だな、だけどそれだけじゃ俺には勝てないぜ！」

そのままギガスを力でねじ伏せ横に倒しマウントを取り殴ついく。

「オラオラー！」

「ガツ！？ ギヤツ！？」

ギガスはグレンファイヤーの猛攻に為す術なく防戦一方に陥っていた。

「ギャオオオオオオオツ！……！」

ガンダーは冷凍光線を放つがジャンボットはロボットのため熱を発しているため凍らず。

「ビームエメラルド！」

腹部のシャツターが開きそこから緑色の光線をガンダーに放ち攻撃、ガンダーは遠くへ吹き飛び氷塊に激突する。

「ジャンナックル！」

左腕をガンダーに向けてロケットのよつに拳を放ちガンダーに追い討ちを掛けると同時にジャンナックルはヒターンしガンダー“”と帰つてくると。

「これで！　トドメだ！」

ジャンブレードをガンダーの腹部に突き刺す、左腕にジャンナックルは戻るとガンダーは切り口から光が放たれ爆発を起した。

「焼き鳥の方は終わつたみたいだからこいつも終わらせるぜー！」

ギガスを頭が下を向くように逆さまに持ち上げ。

「これは結構効くぜ、グレンンドライバー！……！」

そのまま下に勢いよく落とすグレンンドライバーを炸裂しギガスは頭から氷上に激突。

「決まつたあああああああ！」

ガツッポーズを取ると髪の毛を搔き上げるような動作をすると頭部から炎が燃え上がる。

「相手が悪かつたな」

ギガスは後ろへ倒れると白皿を向いており死んでいた。

「焼き鳥、終わつたか？」

「焼き鳥じゃないと何度もグレンに言つても無駄か？」

「わかつて……あ？」

「どうかしたか」とジャンボットは問うとグレンファイヤーが指を差した方には。

「女……？」

「こんな極寒の地になぜ……」

「焼き鳥、てめえ早く変形しろ、確か医療設備あるよな？」

「あ、ああ」

グレンファイヤーは炎に包まれると等身大サイズに縮小していき逆立つた炎のような赤い髪の毛で炎のように強く赤い瞳、極寒の惑星のため厚着をした青年の姿、岬グレンとなる、グレンという名前が気に入つてゐるからこの姿でもグレンファイヤーと名乗るのも少なくはない。

「おい大丈夫か！？　おい！」

雪に埋もれていたのは女性で背中に黒い三対の羽根を付け髪の毛

は灰色っぽく中は黒いワンピースに上着は紫で金の模様が入り杖先が十字の杖を持っていた。

「こんな薄着で！」

近くに変形したジャンバードが着地し扉が開く。

「早く入れグレン！」

「ああ！」

グレンは女性を連れ機内に搭乗しその中にある医療室にジャンバードは案内しすぐに部屋に入る。

「そのカプセルに入れれば後は私がやる」

部屋の中には何個もどんなに身長が高くても入れるカプセルが並んでおりその中の扉に近いカプセルの蓋が上へ上がり開く。

「頼んだぜ、服は？」

「そのままで大丈夫だ、疾しい事は考えていないか？」

「バカ言え！ んなわけねーだろこんなちんちくりん！」

その悪口に反応したのか手に力が入っている女性、胸は……中ぐらいだろう、カプセルの中に入れ蓋が閉じると何かの緑色にキラキラ光る液体が注入されていく。

「なんだよこのキラキラ光つてる水？」

「エスマラルダ鉱石を粉末状に削つて混ぜた医療溶液だ」

エスマラルダ鉱石は船や様々な機器以外にもこのような使い道が

あり使用方法の幅が広い。

「そういうやエスメラルダじやそんなもんあるつて船長達が言つてたな、それを使つた風呂があつて気持ちいとか」

船長とはグレンがかつて用心棒を任されていた炎の海賊の海賊船、アバンギヤルド号の三兄弟船長、ガル、ギル、グルの事である、この三人は人望も厚く歳もグレンより上で物知りな所もあるためエスメラルダ星の名物も知つていた。

「なら入るか？」  
「マジ？ サンキュー焼き鳥！ 寒くて寒くて仕方なかつたんだよ！」  
「礼を言つているか侮辱してはいるのかわからないな…………」

だんだんカプセルの中は満杯になつていぐが顔も浸かる前に酸素ボンベのマスクみたいな物を付けられてから満杯となつた。

「当分この状態にしていれば彼女も助かるだろつ…………だがなぜあんな零下140度の極寒の惑星に一人で…………しかもこんな薄着で」「さあな、だけどこれはただの薄着じやない事は確かだと思つぜ」「

グレンの言葉は正しい、眠つている彼女が着ているのは魔導師が着るバリアジャケット、服で被つていらない所を魔力バリアで薄く塗るよう被つているため無事だつたがそんな事二人が知る由もなかつた。

「まあいい、コイツが起きてから聞けばいいんだ」  
「それは同意だな…………お、湯船が沸いたぞグレン」  
「早速入つてくるぜ……」

グレンはどこからか桶とか取り出して部屋から駆け出た。

「まつたく…………元気だけは取り柄なんだから…………さて、私は辺りの観測を」

ジャンバーードは後の事はコンピュータと時間に任せ自分はこの惑星の観測をするためにブリッジのシステムにAIを切り替えた。

「これは…………」

ジャンバーードは離陸し吹雪の中飛行し辺りを観測していたら地上で何かを発見した。

「これはウルトニウム鉱石…………」

ウルトニウム鉱石とは惑星の中心部にある核であり普通地上に出ている事はないのだが。

「ウルトニウムを掘り出したものが…………」

だが惑星の中心部、例え極寒の惑星でもマグマは流れている、その中を自由に行き来できるものがいるのは信じがたいものだが今自分がカメラに映っているウルトニウムが何よりの証拠のため信じざる得なかつた。

「…………マグマの中を行き来できるの…………奴はできるだらうか…………」

奴とはグレンファイヤーだらう、彼は炎の戦士、マグマの熱に耐えるかもしれない。

「それは犯人がわかつてからにしよう」

今ウルトニウムを戻しても犯人がいるのではまた掘り出されてしまう、戻すのは犯人を捕まえるか倒した後に。

「グレンはいつまで浸かっているつもりなんだ？」

かれこれ一時間は風呂に入りっぱなしのようだつたがそう思つた矢先医療室で保護した女性が目覚めたようなのでAIを切り替えブリッジはオートにした、

だがその瞬間カメラに巨大な影が映るがジャンバードは気付かなかつた。

(んん…………こには…………)

医療室、そのカプセルの中で彼女は目覚めた、名前は闇統べる王、ロード・ディアーチェ、彼女もシユテルやレヴィと同じマテリアルでやはり二十歳ぐらいの体になっている。

マスクが付けられカプセルに入れられているため少し誤解していだ、もしかしたらどこかの組織に捕まり実験台にされるのではと。

「目が覚めたか」

溶液が抜かれていき体を浸していた溶液は流れしていく。

「どうこうする?」

「どうから声が聞こえていいかわからないため警戒をするがジャンバードは簡単に自分の事を説明した。

「なるほど、貴様が我を助けてくれたというわけか

腕を組んで今の状況を把握した。

「すぐに理解してもううて何よりだ」

互いの名前を自己紹介するとシユテルより細くなくレヴィより細かいマテリアルや魔導師について説明をした。

「魔法使い…………信じがたいが零下140度の中をその薄着、バリアジヤケットで凌いでいたんだ、信じざる得ない」「話がわかるな」

蓋が開きカプセルから出るが溶液に浸かっていたため身体中が濡

れている。

「ロードには浴場がある、そこで溶液を洗い流すがいい」

「やうか、なら使わせてもらひ

ロードは部屋から出るとジャンバードは廊下にACEを切り替え案内を始めた。

「何か忘れているような……」

そう、何か忘れていたのだ、それは浴場に到着しすぐに分かった。

「誰か居るみたいだぞ？」

「そうだ……浴場にはまだ！」

思ひ出しがを上げるジャンバード、そして中から。

「どうかしたか焼き鳥？」

グレンがまだ入っていたのだ、グレンは扉を開く、腰にはバスター  
オルを巻いている状態でギリギリだった。

「お、起きたんだな～良かつた良かつた

ロードが用意めた事により安堵するグレンだが今の姿は……

『無礼者…』

「えつ…?」

急のためなぜ言われたかわからずグレンは道を開けロードは浴場

に入った。

「同時に少しキツいなあ…………おい焼き鳥」

「なんだ？」

「アイツからなんか聞いたのか？」

「一応はな、ブリッジでそれを話すとしよう」

グレンは着替えを済ませるとブリッジへ移動するのだった。

そしてブリッジでグレンとジャンバーードのロードのことをついて話していた。

「魔法使いか…………マーナイトみたいな？」

「マーナイトの技もある意味魔法に近いかもしれない、鏡を作つたりそれを使い瞬間移動したりと。

「わからないがグレンが言つ通りあの薄着はただの薄着ではなかつたぞ」

「俺の感も当たつたってわけか」

湯上がりの牛乳を飲みながらジャンバーードの話を聞いていると着替えたロードが入ってきた、グレン達が着ているようなものではなくドレスを。

「あれ、姫さんのじゅねーか？」

「女物はアレしかなかつたんだ、仕方ない」

エスメラルダ星の王女のエメラナのドレスを貸したようだつた。

「済まないな、これは貴様の大事な主のものだろ?」

「気にするな」と返すと。

「ところでの無礼者は誰だ?」

「無礼者って……」

グレンに指を差して問い合わせると「岬、グレン、グレンファイヤー」と名乗る。

「タオル一丁は確かにな……」

「その自覚はあつたのかー?」

ジャンバーードに仰天されてしまい少し転け「おーおー」と突っ込みを入れる。

「焼き鳥……」

「まさか貴様に羞恥心があるとは」

「俺をバカにしてるだろー?」

「もちろんだ」

「てつめえー!」

この状態では殴り合ひの喧嘩はできないため口喧嘩となつて暫りく言い合いが続いた。

「だがバカにされても仕方ないだろ」

「分かるか？」

「ああ」

「ここにグレンの味方はいなかつた、その事に絶望しつつ戦おうとなんか決意するグレンだがそこで気になつたのが。

「お前これからビースンだよ？ 別の宇宙から来て行く宛てもねーんだろ？」

「そうだが……」

外は零下140度の極寒の地、ほとんど決まつているようなものだがロードはプライドが高い故、自分から着いていくとは言こづらかつたが。

「なら来いよ」

グレンが最初にロードを見付けた時に運んだ、最初から気に掛けていたのは彼だ、ぶっきらぼうな言い方だが彼なりの優しさと自分から言いだしにくいロードの代わりに出た言葉でジャンバードもその事は分かつっていた、仲間だからだ。

「行く所ねーなら俺達に着いていけばいいぞ」

ウルティメイトフォースゼローの人情家と言つても過言ではないだろう。

「いいのか？」

「どつかの誰かの言葉借りたら無理やり…………俺の仲間になれ！ つて言うはずだぜ？ なあ焼き鳥？」

「確かにな」

そのグレン達を無理やり仲間にしたウルティメイトフォースゼロのリーダーはといふと。

「ぶふえっくしょん！」

「風邪ですか？」

「誰か俺の悪口言つてやがるな……」

「で、どうある？」

もう一度問うと。

「なら……頼む、仲間に入れさせてもらひつ」

自分から入つてやるという物言いだがそれが彼女の言い方なのだ、ウルティメイトフォースゼロには色んな星の戦士がいる、個性派ぞろいのチームだ、どんな言い方でも気にしないだろ？。

「もちろんいいぜ

「大歓迎だ」

しかし各惑星でウルティメイトフォースゼロのメンバーはマテ

リアルズを仲間にしたのだつた。

To the Next Episode . . .

Episode · 05 零下140度の死闘（後書き）

次回予告

グレン

「ウルトニカム鉱石？」

ロード

「！」の中から探しだせばいいのか？」

ギラードラス

「ギャシャアアアアアアアーッ！－！－！－！」

レビィ

「あ、王様～！」

シユテル

「やはり一人もいましたか」

ミラーナイト

「それが一番の策ですよ」

ゼロ

「ブラックホールが吹き荒れるぜ！」

次回『Episode・06 集結！ウルティメイトフォースゼロ』  
！』

**E p i s o d e . 0 6 集結! ウルティメイトフォースゼロ! (前書き)**

登場怪獣

核怪獣ギラードラス

核怪獣アルビノ・ギラードラス

冷凍怪獣マーゴドン

登場

## Episode .06 集結！・ウルティメイトフォースゼロ！

Episode .06

集結！・ウルティメイトフォースゼロ！

「ウルトニウム鉱石？」

ブリッジ、グレンとロードはジャンバードの話を聞いていた、惑星の核にしかないはずのウルトニウム鉱石が地上で発見した。

「グレン、お前はマグマの中に入れるか？」  
「ん」.....制限はあるが.....なんとか行ける

ウルトニウム鉱石を掘り出している犯人を止めた後の事も話し、その犯人を見付けるために動く事となつた。

「そういえばさ」「なんだ？」

グレンが唐突に話しかけてきた。

「ウルト－ウム鉱石つてなんだ？」

「我も思った」

絶句した、知らないで聞いていたのかと、ジャンバーはウルト－ウム鉱石が惑星の核を形成している物質の一つで大量に掘り起されたら惑星が崩壊すると。

『ナ、ナンダツ テー！？ それは本当か！？』

呆れてものを言えなかつた、ため息を吐く、AIだが吐くのだ。

「貴様らあああ…………」

「取り敢えず早く探そづぜ、そのウルティメイト鉱石つて奴」

「ウルト－ウム鉱石だ！」

「無駄にカツコい名前だな」

ジャンバーは猛吹雪の中、飛行を続けウルト－ウム鉱石を掘り出す犯人を探し続けた。

「だけどさ、その石を掘り出してる奴このまま飛んでるだけで見つかるのかよ？」

正論である、コンルも広い、その全体を探すのに時間は掛かる。

「確かに……手分けをしても長時間は外にはいられない」

どんなに寒さに強くとも長時間その空気に曝され続けたら凍傷を負う可能性もある、何か効率的な搜索ができるいかを考え始めた。

「なあ、ウルトニーウム鉱石の反応を掴めないのか？」

「掴めるこな掴めるが惑星一つに鉱石が幾つあると思ひ？」

その反応を追い犯人を見付ける、ロードはそう提案したがジャンバードは横槍を入れ阻むがまだ話は続いていた。

「だからその移動する反応だけを追えればいいのでは？ 動いているなら絞り込めるだろ」

つまりはいつも事、その動いているウルトニーウム鉱石が鉱石が密集している地点から離れ、鉱石の反応が薄い地点まで移動し地上に出れば反応が掴めるということ。

「なるほど、それなら行けるさすだ」

「頭いいな～お前」

「もつと警める！ もつと警めるがいい我を！」

天狗になつてゐるがこの際どうでもいい、ジャンバードはすぐには惑星全体の地底に埋まつてゐるウルトニーウム鉱石の反応をモニターに映し出した。

「…………す」<sup>2</sup>「数だな」

「惑星全体だからな」

モニターに映る丸い図がコントル、中心部の回りにある赤い反応がウルトニーウム鉱石である。

「！」の中から探すのか？」

「ああ、言ひだしたのはロードではないか？」

言わなければよかつたと思いながらモニターを睨む。

「だけどよ、いきなり見つかるなんて事……………ねーよな?」

「そんな事ある?」

その一言がブリッジの中に響き渡りモニターには移動ウルトニア  
ム鉱石の反応が、二つも。

「マジかよ……………しかも二つだせ？」「

一番近い場所から向かつた方がいいな」

ジャンバードは移動するウルトニウム鉱石の反応が近い場所へ飛行する。

そのウルトニウム鉱石の反応が出ていた地上には四つの赤い結晶体が頭に生え背中にも同じような物が並び前足がヒレみたいな怪獣、核怪獣、ギラードラスが口からウルトニウム鉱石を溢しながら地上に現れた。

「ギャシャアアアアアアアーツ……」

頭の結晶体が発光すると更に吹雪は強くなる、ギラドラスは天候を自由に変える能力があるためその能力で身の回りを守っている。

「見付けたぞ！」

そこにジャンバードが飛来しミサイルを発射しギラドラスに攻撃を仕掛けた。

ミサイルは体に直撃するがギラドラスはビクともしていなかつた、マグマの熱にも耐えるその頑丈な体には効果がなかつたのだ。

「焼き鳥！ 効いてねーぞ！」

「怪獣が地中に潜るぞ！」

小島文庫

ギラドラスは前足を器用に使い氷の大地を掘り起こし地中に潜った。

「焼き鳥！俺が追い掛ける！」

グレンはブリッジから出ていきジャンバーードに備わった転送装置で外に出るとステイック状のアイテム、ファイヤースティックを握り。

「ファイヤアアアアアアアアアアアアアーツ！…………！」

翳し、そう叫ぶとグレンは元の姿であるグレンファイヤーに変身、巨大化し、ギラドラスが掘り進む穴に入り追跡を開始した。

「グレンが追い掛けている今、我々はもう一つの移動するウルトニア

ウム鉱石を追おつ

「そうだな」

ジャンバーはもう一つの反応を田指し後はグレンファイヤーに任せその場を飛び去った。

「待ちやがれ！」

グレンファイヤーは地中を掘り進むギラグラスを追跡し奥深くに進んでいく。

「すばしっこい野郎だぜ！」

拳を突き出しグレンスパークという火炎弾を放つがギラグラスはその長い尻尾で弾き壁に激突し爆発するがその炎の中をグレンファイヤーは突き進む。

「弾きやがつた！ ファイヤースティック！」

変身アイテムでもあるファイヤースティックを取り出し棒状の武器となりそれを持ちギラグラスを追尾していると大きな空洞に出る。そこは断崖絶壁で谷底にはマグマが流れ温度も風景も地上とは違つた。

「熱つ！ やつぱマグマは俺の性向わねーや……

崖の上に立ち辺りを見渡すと、ギラドラスがウルト－ウム鉱石を探取しているところを田撃。

「さうやってウルティメイト鉱石を食つていたのか

まだ名前を間違えていた、だが相手が判ればそんな事はどうでもいい、グレンファイヤーはファイアーステイックを構える。

「ああ～て、行くぜ！」

グレンファイヤーは駆け出しファイヤーステイックを振るつが、ギラドラスはそれを避けた。

「速つ！？」

その速さに驚愕していると、ギラドラスは突進してきた。

「つかつ！？」

紙一重のところを避けファイヤーステイックを振り下ろし背中に叩き付ける。

「ギャシャー！」

ギラドラスは派手に転んで壁に岩に激突。

「今だ！」

一瞬で接近しファイヤーステイックを何度も叩き付けていく。

「オラオラー！」

武器を仕舞い炎が纏つた素手で、ギラドーラスの顎や頬を殴り付けていく。

「どしたどした！」

グレンファイヤーはテンポよく、ニヒパンチを繰り出し攻撃していく。

「わひと、やるやうトジメとこきますか」

ギラドーラスを持ち上げて勢いよく地面に叩き落としグレンドライバーを炸裂した。

「これでしめえーだよ」

頭が地面にめり込み足をばたつかせているとグレンファイヤーはファイヤースティックを出し炎が纏い強く輝くと。

「オラアアアアアアアーツ！！！！！」

そのまま振り下ろし棒状の武器だが炎を纏っているため叩き切る感じとなりギラドーラスは縦に真つ一つとなり胴体からウルトーウム鉱石が零れ落ち倒された。

「すばしっこかったがそれだけじゃ俺には勝てないぜ」

後はウルトーウム鉱石を元にあつた場所に戻し地上を田指し飛び立つた。

「IJの辺りのはずだ」

ロードはバリアジャケットを身にまといジャンバードから出てウルトニウム鉱石の反応を追い掛けている。

「アレだな」

二人の目に入ったのは白いギラドラス、アルビノ・ギラドラスだった。

「まずは我からー。」

エルシニアクロイツの杖先をアルビノ・ギラドラスに向け足下に白い三角形の魔方陣が現れ白い魔力スファイアが形成されていく。

「アロン……ダイトオッ！」

白い砲撃を放ちアルビノ・ギラドラスの胴体の側面に直撃させるがやはり効果はイマイチのようだ。

「ギャシャアアアアアアアーッ…………！」

アルビノ・ギラドラスは口から光弾を放ち攻撃、散開して攻撃を避けるとジャンバードがビームとミサイルによる一斉攻撃をし直撃させていくがやはり今一つだった。

「黒いのと変わらぬぐらうの頑丈さだな」

白い吐息を吐きながら思つた事を口に出すローデ、隣にジャンバードがジャンボットに変形し宙に静止する。

「焼き鳥、貴様そんな事できるのか？」

「焼き鳥ではない！」

「冗談だ」

「まつたく」と歯くと左肩の防具を外し巨大な斧バトルアックスとなる。

(雷刃のバルーフィカス思い出したな)

しみじみと思いつつアルビノ・ギラドラスを睨む。

「で、どうする?」

「そうだな…………同じ所を正確に狙い攻撃するのが一番の策だな」

//ワーナイトの戦法を使い攻撃しようと提案していたが。

「それが一番ですよジャンボット」

「ここからか声が聞こえてきた、巨大な氷塊から鏡が現れると銀色の拳が、そして全身を飛び出し姿を見せた。

「//ワーナイトー。」

イメールにいた//ワーナイトが駆け付けたのだ。

「あ、王様ー！」

「レヴィー！？」

//ワーナイトの銀色の手の平にはレヴィーが居つせりから飛んでロードの隣に。

「久しぶりー。」

「まさかお前もここにきてるとなると……」

ゆるやかな話をしているアルビノ・ギラードスが駆け出し飛び付いてきそうだったが桃色の閃光が直撃し吹き飛ばされた。

「やはり一人も居ましたか」

「シユテル！」

セヒニシユテルが厚い雲の中から出てくるように降りてきた。

「シユテルー！」

「おつと」

レヴィーはシユテルに飛び付いてロードも巻き込み抱き合ひ、頬擦りして再会を喜んだ。

「おいやせ、恥ずかしい」

「王様のシンデレラ」

「誰がシンデレだ！」

そして金色に輝く光が氷の大地に降り立つた。

「はるばるアクアスから来てやつたぜ  
『ゼロー』」

光が収まるとそこにはゼロがいた。

「よつ、グレンは？ まさかとつとう死亡フラグ立て過ぎて……  
南無～」

手を合わせてほざいていると後ろから炎の戦士がやつてきた。

「誰が死亡フラグ立て過ぎてるって?  
「生きてたのか！？」  
「生きてるわ！」

グレンファイヤーも到着しウルティメイトフォースゼロが揃い、マテリアルズも揃った。

「シユテルも王様も会わないうちに大きくなつたね

「お前もだろ」  
「ですが戦いには邪魔なだけです」

アルビノ・ギラドラスを放つたらかじこしまたゆるやかな話をしているが。

「取り敢えず、寒いしアイツをなんとかしようぜ、他にも怪獣いるみてーだし、しかもなかなか厄介な」

氷塊の陰から巨大な白い毛並みを携わえたゾウのよつた怪獣が姿を見せた。

「マー、ゴードンか」

それは冷凍怪獣マー、ゴードン、様々な惑星でマグマを吸収し数多くの惑星を滅ぼしてきた恐るべき怪獣だ。

「マー、ゴードンは俺とグレンでやる、//マーナイトとジヤンボットはアルビノ・ギラドラスを頼む」

「御意」

「任せられた」

ゼロとグレンファイヤーはマー、ゴードン、//マーナイトとジヤンボットはアルビノ・ギラドラスの方を向く。

「私はゼロの方に付きますので」

「我ばグレンだな」

「僕はもちろん鏡矢～」

マテリアルズの役割も決まり。

「ブラックホールが吹き荒れるぜー！」

ゼロは右腕を伸ばし人差し指と親指を立ててマー、ゴードンに向けて言い放つと一斉に走りだした。

「ゼアアツ！」

「あらよつとー！」

ゼロとグレンファイヤーは同時にマーゴドンの顎を蹴り上げるとタイミングよく上段回し蹴りを左右から食らわしタックルで跳ね飛ばすと後ろから桃色と白の砲撃が放たれ更に吹き飛ばす。

『危ねつ！？』

砲撃は頭の先を擦つており少し煙が上がっていた。

「あ、すみません、まさか擦るとは…………」

「いや、そんな所にいるのが悪い」

『酷つ…』

マーゴドンはすぐに起き上がり冷凍ガスを鼻から噴射するがゼロはウルトラゼロティフォンサーを展開しガスを受け止める。

「ファイアアアアアアアアーツ！－！－！－！－！－！

拳に炎を纏わせて突撃しマーゴドンの顔面をパンチすると火花を散らすのだがその火花は体に吸収されてしまった。

「あれえ？」  
「アイツはエネルギーを吸収する事ができるーだからさつきの砲撃も……」

二人の砲撃もかなりの高威力、もしかするともしかするであった。

「バオオオオオオオン！－！－！－！－！－！

マー・ゴドンは鼻や身体中から勢いよくガスを噴射し更に凶暴化しまるで暴れ馬のように動き回り鼻を伸ばし氷塊を破壊しその破片で攻撃を仕掛けた。

「地形を利用した見事な攻撃ですね……」

「何感心してるんだよー。」

なおもマー・ゴドンは暴れ回るため近付けない。

「//リーナイフ！」

//リーナイトは//リーナイフを放ちアルビノ・ギラドラスに攻撃をするがすべて弾かれる。

「雷光斬！」

レヴィイが金色の砲撃を発射するがそれは後退るだけで大したダメージはないがすべて同じ所、右側面の胴体の一部分を正確に直撃させていた。

「ジャンナックル！」

ジャンボットはジャンナックルを発射しましたアルビノ・ギラドラスの右側面の胴体に直撃させる。

「連携しよーー！」

その一言に//リーナイトは頷きアルビノ・ギラドラスの回りを鏡の壁で囲み両手を交差させシルバークロスを放つ体勢に入るとバル

「フィカスから金色の三日月状の刃が伸びる。

「シルバー……クロス！」

「電刃翼！」

二つの刃が飛ばされ重なり合いシルバークロスに雷の属性が追加されアルビノ・ギラドラスに直撃すると反射し壁に直撃するとまた反射とギルファス戦の時と同じ戦法で攻撃していく。

「…………」

反射していく刃をただじっと見つめているとようやくシルバークロスはアルビノ・ギラドラスの胴体に突き刺さり更に電刃翼の効果で体を痺れさせ動きを止めると壁が消滅する。

「今だジャンボット！」

「ああ！」

ジャンボットは走りだしバトルアックスを大きく振り上げ。

「必殺！ 風車！」

勢いよく振り下ろしシルバークロスが突き刺さる胴体にバトルアックスが直撃するとアルビノ・ギラドラスは大きな咆哮を上げ倒れ込み傷口からウルトニウム鉱石が零れ倒された。

「僕達の勝利だ！」

一方マーゴドンに苦戦しているゼロ達はどうするか冷凍ガスをウルトラゼロティーンサーとシコテルとロードの魔力によるバリア

で凌ぎながら考えていた。

「どうすんだよゼロスラッガー？」「..」

「いひなつたら奴が吸收し切れない程のエネルギーを浴びせるしかねー……」

ゼロスラッガーが頭部から離れ乱舞するとカラータイマーの左右に装着され、ゼロシングルショートの体勢に入りゼロスラッガーは青く輝いていく。

「それなら得意中の得意ですね」

ガスが止まったのを見計らいバリアを消滅させるとそれぞれの魔方陣が展開されデバイスをマー、ゴドンに向ける。

「吸収し切つたらグレン！」

「グレンスパークがましてやるぜ！」

先にゼロツインショートがマー、ゴドンに放たれ直撃。

「ルシフュリオーン……ブレイカアアアアアアアアアアーッ！……！」

そしてシユテルのルシフュリオンブレイカー。

「エクス……カリバアアアアアアアアアーッ！……！」

最後にロードの巨大な砲撃魔法のエクスカリバーが放たれマー、ゴドンに直撃。

「ゼアアツ！」

ゼロは光線の威力に吹き飛ばされ掛けたが踏ん張り威力を上げていぐ。

「グゴオオオオオオ…………！」

マー「ゴドン」もエネルギーを吸収し切ろうと耐えるがだんだん体が膨れ上がつてくる。

「今だグレン！」

「おう！」

光線を止めグレンファイマーの体が黄金に輝いてくる、そして走りだしマー「ゴドン」にしがみ付く。

「ゴイツは効くぜ…………グレンスパアアアアアアアアアアアーク…………！」

そのまま燃え上がりマー「ゴドン」はそれをも吸収しようとしたが限界を越えており断末魔を上げる間もなく木つ端微塵に吹き飛んだ。

「ふう……これでしめーか」

ジャンボット達も終わったのを確認しそう口に出すグレンファイヤー。

「寒い…………早くジャンボット、変形しろよ」

「ああ」

戦闘後、ゼロ達は人間の姿となりジャンバードの中に入つていった。

To the next Episode . . .

## Episode · 06 集結！ウルティメイトフォースゼロ！（後書き）

次回予告

シン

「何か覚えてないのか？ なんでアナザースペースに来たのかを」

レビィ

「青くて鳥のような綺麗な光が」

シユテル

「まさにロストロギアですね」

ジャンバード

「モシリスで未知のエネルギー反応をキャッチした」

シン

「新生ウルティメイトフォースゼロ、出動だ！」

次回【Episode · 07 モシリス】

## Episode .07 モシリス

前回、グレンファイヤーとジャンボットはウルトラマンゼロとハーナイトと合流、同時にロード・ディアーチェもシユテル・ザ・デストラクターとrevi・ザ・スラッシュヤーと新たなウルティメイトフォースゼロのメンバーも合流するのだった。

Episode .07  
モシリス

「で、何か覚えてないのか？ なんでアナザースペースに来たのかを」

ジャンバードのブリッジの中、シン達はシユテル達に聞いていた、なぜこの宇宙に来たのかを。

「ほとんど覚えていません」

「僕も」

「我もだ」

同じ答えしか返つてこずまさか三人一緒に思わず間が抜けた。

「あ…………そう…………じゃあ何かそれっぽいものは?」

思い出せうと頭を抱えていると

「あ、そういうえば…………」

レヴィが先に声を上げた、何かを思い出し拳で手の平をポンと叩いて。

「体が消滅して意識だけが次元の狭間の中をさまつてた時なんだけど…………あの時光が見えた」

後の二人も思い出したように頷き。

「青くて鳥のような綺麗な光、最初は嫌だなって思つてたんだけ見てたら暖かくて、前にいた闇の中より」

「確かに…………惑星を掴めるぐらいの巨大な黒い手の平の上で光つていました」

「あれほどの強大なエネルギーだ、次元震を起こせても不思議じゃない」

次元震とは時空を揺るがす地震である、それが影響し様々な宇宙の住人や地域や建物が別の宇宙に行き来してしまうこともある。

「惑星を掘めるぐらいいの巨大な黒い手の平…………見覚えがある  
よつな…………」

シンは顎を指で支えるような形にしていると。

「これじゃないのか？」

ジャンバードがモニターに巨大な黒い手の平型の要塞マレブラン  
デスを表示した。

『それだ！』

三人は同時に声を上げてモニターに指を差した。

「青くて鳥のような綺麗な光…………まさかな…………」

シンは感付いた、その光が何なのかを、ジャンバードはその要塞  
で起きた戦いの最終決戦の映像を表示した、それにはグレンファイ  
ヤー、ジャンボットが黒くて背中に緑色に光る鉱石を生やした赤い  
模様が入った怪獣と戦っている映像だった。

「これはなんだ？」

「これは私とジャンバードが守護する惑星エスマラルダで起きたベ  
リアル軍との戦いです」

ベリアル軍について簡単に鏡矢が説明しているとその怪獣がその  
主導者カイザーベリアルがエスマラルダ鉱石により凶暴化したアーキ  
ベリアルと話す、  
アーキベリアルは口から強力な破壊光線を上にいた何か弓矢を構え

たゼロに放つのが鏡が割れその破片の中にミラーナイトが、ゼロを鏡で「写し陽動していたのだ。

本物のゼロはアークベリアルの背後により青く光る弓矢を発射した、まるで鳥のような形だった、矢はアークベリアルの胸に直撃すると激しい光を放ちアークベリアルを消滅させた。

「おそらく君達が見たのはこれだ、ゼロがウルティメイトイージスの力でアークベリアルを倒した時の光だ」

「ウルティメイトイージス？」

シンは左腕に嵌めているウルティメイトブレスレットを見せた。

「これは神の力を持つと言われる伝説の超人ウルトラマンノアの力が秘められたこの宇宙に伝わる伝説の盾なんだ」

「神…………まさにロストロギアですね」

シン達は自分達が知らない単語が出てきたため首を傾げるとシュテルが説明に入った。

「ロストロギアとは過去に滅んだ超高度文明から流出し特に発達した技術や魔法のことです、闇の書もそのロストロギアの部類に入ります」

その説明をジャンバードは記録しているのだが話に着いていけなくなつたグレンは爆睡し始めた。

「そして魔法を使わない科学兵器等は質量兵器とされています」

質量兵器はジャンバードやレギオノイド等がそれに当て嵌まるだろ。

「なるほどな……そつちにも色々な科学があるってことか」

シンは光の国で地球の防衛の任務に着いた事があるウルトラマン達から地球の科学でできた兵器等を聞いた事がある、ネオマキシマ、テクノプラズマ、オプチカムフラー、ジユやメテオールと言つたものを。

「やつこつ」とです

が用意したお茶に口を付けるとジャンバードはまとめに入つた。

「君たちが消滅しきのように実体、体が復元され二十代ぐらゐの体に成長しきの宇宙に出てしまつたのは」

精神が時空の狭間にさ迷つてゐる時にアナザースペースの近くまで接近しゼロのウルティメイトイージスによる攻撃により次元震が起こり精神がアナザースペース内の様々な惑星に散らばる際に放出されたエネルギーを吸収したのかその量が多く強過ぎて体が復元し更には二十代の体に成長してしまつたと推測した。

「とこつ」とだ

約一ヶ月ちんぶんかんぶんで無い頭をフル回転して理解しようとしているが全然理解できないようだつた。

「無理に理解しようとしたくないですか？」

シユテルに言われ考えるのをやめた。

「そうだな  
「そうする」

ジャンバーードはグレンを「バカ」、ロードはレビイを「アホ」と思つのだつた。

「それで本当にこれからどうすんだよお前ら」

シンはもう一度最後に三人にこれから的事を聞いてみた、必要ならばど二かの人口密集地がある惑星に送る事を考えたが。

「私に仲間になれつて言つておいてそれですか？」

鏡矢達はやつぱりとこゝ顔していた、言つていたのかと。

「なので着いていきますよ、やる事ありませんから私は」「我もだな、グレンとジャンバーードに誘われたし」

二人は仲間になれと言われたから着いていくのだが一名違つた理由が。

「僕は鏡矢がいるから」「はい」

何か不思議な桃色のオーラが放たれているのに気付き何があつたのだろうか質問してみた、グレンが。

「はいはいはーい！ 二人は付き合つてゐるんですかー！」

まるで修学旅行の乗りで。

「はい、私達は……」

「結婚を誓い合つた仲だから～」

顔を赤くしてカミングアウトするレヴィ、その発表に「ナ、ナンダツテー！？」それは本当かい…？」と反応するシンとグレン。

「僕がプロポーズしたんだよ～」

「されてしましました、不覚にも唇まで」

頭搔きながら記者会見を続いていたら一人は「リア充爆発しろー」と叫んだ。

「お前達……バカか」

ジャンバーはもう言わずにはいられなかつた。

「何か負けた気がします」

「うぬ、我もだシユテル、あの末っ子があそこまでな……

「嬉しいような複雑のよつな」

お母さんか！ 的な話をしているとアーラートが鳴り響く。

「どうしたジャンバー！」

「惑星モシリスで救難信号をキヤッチした」

「モシリス……確かにアヌーの開拓キャラバンがそこにもあつたはずだ、化石燃料や井戸を掘つて移住できるように」

モニターに茶色い惑星が写し出される、それがモシリスでこの茶色はすべて砂である。

「全体が砂と少しの岩しかない惑星モシリス、一体ここで何が……」

「……」

だが考へてゐる暇はない、救難信号が出たからには助けを求めている人々がいる、そう思い。

「行くぞ、モシリスに、考へてる暇はない」

「そうだな、着いてから考えよつぜ」

髪を搔き上げ答えるグレンに「御意」と返す鏡矢。

「で、いいよな？」

シユテル達にも聞くが答へは決まつていた。

「」のチームのリーダーはあなたのですからその決定に従いますよ

「我也同意だ」

「僕も」

フツと笑うとモーターの方を向いて。

「ジャンバー！ 進路をモシリスに向けてジャンプだ！」  
「了解！」

ジャンバーはワープ機能を使い誤差はあるがその場から消えモシリスに向かつた。

その頃、救難信号を出したモシリスに滞在する開拓キャラバンでは……

「レギオノイドじやないアレはなんなんだよー！」

キャラバンのメンバー達は何かから逃げていた、後ろから迫る巨  
大な黒い虫のような生物から。

「ペロロロロロロ……ゼーットーン」

To the Next Episode . . .

## Episode · 07 モシコス（後書き）

次回予告

レビ

「本当に砂しかない」

シン

「アレは…………まさか…」

ゼットン

「ゼットン…………ペロロロロロ」

シユテル

「砲撃が効かない！？」

グレンファイヤー

「それとめちゃくちゃ強い！」

次回『Episode · 08 宇宙恐竜』

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1303z/>

---

ウルティメイトフォースゼロ～THE MATERIAL OF SAGA～  
2011年12月16日18時48分発行